
恋愛ゲーム

七度

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛ゲーム

【Nコード】

N5916N

【作者名】

七度

【あらすじ】

「リアルギャンルゲーをやろう！」遊戯部部长、河上神子の一言から始まったゲームは、一人の男を自分に惚れさせたら勝ちというもの。その一人の男に選ばれ、美少女たちから毎日誘惑される沢村浩太。彼は誰かを好きになってしまうのか？それとも……

00話「暇だ」

「暇だ」

部屋の奥の窓に近い席で、一人の少女が呟いた。

周りにいる数人の少女たちは、興味なさそうに、

本を読んだり、ゲームをしたり、瞼を閉じたまま壁に寄り掛かったりしている。

「暇だ、暇だ、暇だああ！！」

先程の少女が大声で叫び、椅子から立ち上がったところで、その場の全員が、彼女の方を見た。

「なあ、彩」

壁に体重を預けていた少女に向かって、立ち上がった少女は呼びかける。

「何ですか、神子様」

「暇なんだ、助けてくれ」

神子と呼ばれた少女は瞳をウルウルさせながら、彩と呼んだ少女に近寄った。

「そうですね、困りましたね」

真面目な顔をして、彩は考えるように右手を頬に当てる。

「そうなんだ、困ってるんだ。困ってるんだ」と何度も繰り返しながら

神子は目の前の彩を、がくがく揺すった。

「ギャルゲームも、乙女ゲームも飽きたんだ！ツンデレがデレた瞬間に全てがどうでもよくなっただんだ！」

「ぎゃるゲー？おとめゲー？」

耳慣れない言葉らしく、彩は不思議そうに首を傾げる。

「とにかく、何か面白いことがしたい！」
大声で宣言し、神子は部屋全体を見回した。

「ねえー、神子ちゃん」

先程まで携帯ゲーム機で遊んでいた少女が、神子に声をかける

「あんなに楽しそうに攻略キャラの話してたのに、もう飽きちゃったの？」

幼い声、小学生にしか見えない外見。しかし神子は、少女に対して敬語だった。

「そうなんです。エンディングを迎えた途端に、今までの熱が冷めてしまっ」

「あら、困ったねー」

「エンディングまでの、過程は楽しかったです！でも、でも、告白されたら、相手に何の興味も無くなってしまっ……」

「他のキャラクターも、攻略したら？」

「全員終わりました」

「……」

『昨日購入したって言ったのに、早すぎだろ』とは、誰も突っ込まなかった。

「んー、ゲームの恋で飽きたなら、本物の恋でもしてみれば？」

視線を元のゲーム機に戻して、幼い少女は提案した。

「ゲーム……恋……」

ぶつぶつと二つの単語を呟きながら、神子は真ん中の大きなテーブルの周りをぐるぐる歩き始める。考え事をするときの、彼女の癖だった。

しばらくして、ガンツと大きな音とともに自分が座っていた椅子に

ぶつかって、神子は歩くのをやめた。そして、満面の笑みで声高に言った。

「リアルギャルゲーをやろう！」

一同、無言。彼女の思いつきで、今まで色んなことをやらされた。今回もどうやら、厄介なゲームを思いついたらしい。

「ギャルゲーで、ハーレムなんてよくあることだ。しかし日常では、私は見たことが無い！見たことがないなら見たいと思うのが人間だろう。よし、ハーレムを作るぞ！」

「あの、神子様」

遠慮がちに、彩は、腰に手を当ててふんぞり返る神子に声をかけた。「意味がよくわからないのですが？」

「説明してやろう！つまりだな、一人の男を部員全員で誘惑するんだ。その男が、誰か一人に惚れたらゲーム終了。男を自分に惚れさせた者の勝ち。勝ったやつには……そうだな『部員全員に何でも一週間命令できる権利』を与える！」

一瞬生まれた沈黙。だが、弾んで楽しそうな声が、その場の空気をぶっ飛ばした。

「おもしろそう！あたしそれやるー」

外見小学生少女が、手を上げる。

「小桃先輩なら、わかってくれると思ってました！！」

神子は、小桃と呼んだ少女の手を取って、ぶんぶんと振り回す。

「さっすが、神子ちゃんだね。いつも面白い思いつきをありがとー」小桃はニツコリと、笑う。後ろに花が舞っていると錯覚してしまいそうな、可憐な笑みだった。

「さて、…絹代」

神子の声に、少し離れた場所で本を読んでいた少女が顔を上げる。

「お前はどつする？」

絹代は、微笑む。

「神子さんの提案なら、構いません」

「決まりだな」

それは、部屋の中の全員が感じていた。二人が肯定したことで、ゲームの開始が決定される。

「おい犬」

少女ばかりのこの部屋で、一人だけ隅の方にいた少年に、神子は命令した。

「お前は審判をやれ。男が誰に惚れたか、正確に判断しろ」

「それはいいけど、犬はやめろ！犬って呼ぶな！犬って ……」

ギロツ 少年を睨む神子は恐ろしい顔をしていた。

「ごめんなさい」

抗議の言葉を飲み込んで、少年は頭を下げる。今の彼女に何を言っても無駄だと正確に判断したのだろう。

「では、ギャルゲーの主人公役を選ぼう。確か戸棚に、今年の新入生の個人情報があっただろう。……おい犬、持ってこい」

どうしてそんなものがこの部屋にあるのか。誰も聞かない、聞いてはいけない。

少年は慌てて、棚から分厚いファイルをひっぱり出すと、神子に渡そうと振り返り、

「あっ」

先程、神子がぶつかった椅子に足を引つ掛けた。

がつん 少年が顔から床に倒れ、

ばさっ ファイルが宙を舞う。

中に入っていた、個人情報の一枚が飛び出す。ひらひらと舞ったそ

の一枚は、偶然にも神子の足元に落ちた。手に取り、それを読み上げる。

「……沢村 浩太」

「運命だね、決まりだねー」

「その方で、いいのですか？」

「……参加したくないです」

「顔があっ顔があっ！！」

他の4人の言葉は、そのときの神子には聞こえなかった。そして

「待っている、浩太」

にやりと、彼女はこれからの楽しい日々を想像して笑った。

00話「暇だ」(後書き)

スタートしました。

書いていねば、上手くなるかな…と、甘いことを考えてます。

01話「好きだ」

沢村浩太は、今年の4月に紅葉学園に入学した。両親の勧めで家から徒歩で通えるここを選んだが、本当は別の学校に行くつもりだった。

(でも、しかたないよな……)

入学して2か月も経っているのだ。今さらそんなことを考えても無駄だと分かっている。

行きたかった高校は忘れよう、浩太は顔を上げた。

全ての時間割が終了し、生徒玄関は部活に所属していない生徒たちの声で溢れている。浩太は、自分の下駄箱からスニーカーを取り出し、足を突っ込んだ。そのまま外へ出て、校門へ向かう。

6月、じりじりと肌を焼く太陽は夏を感じさせ、湿気を含んだ風が頬を撫でた。学園と家はそんなに離れていないが、早く帰って汗をかいたシャツを着替えたいと思い、自然と速足になる。自転車で横を通り過ぎた友人に手を振って、校門を出ようとした時だった。

「沢村浩太！」

背後から鋭い声で呼ばれた。振り返り、声の主を確かめようと辺りを見回す。

約3メートルほど先に、一人の少女が立っていた。

赤茶色のふわふわした長い髪、勝ち気そうな瞳、整った顔。「沢村浩太！」と、もう一度呼ばれ、先程の声は彼女のものと判断する。

「お前、沢村浩太だな」

「はあ、そうですね」
フルネームを繰り返さないでほしい。下校途中の生徒たちが、自分と、この少女に注目しているのに気がついて、浩太は困った顔で返事をした。

「良かった、お前に言いたいことがあったんだ」

少女はニツコリと笑うと、次の瞬間とんでもないことを言った。

「好きだ、付き合ってくれ」

すきだ、つきあってくれ？

突然の事で、頭が真っ白になる。

(え、俺今告白されたの？初めて会った子に？)

その一言に何も返せないまま、ぼおっと立っている浩太の耳に悲鳴が聞こえた。野太い悲鳴が。

「嘘だあああ！かつ神子様が……お…男に告白!?!」

「夢だ、誰か俺の頬をぶつてくれ!!これは夢なんだ!!」

「神子様がつ、学園のアイドル神様があああ!!!」

学園のアイドルって、いつの時代だよ。と、心の中で密かに思いながら、目の前の少女に意識を戻す。

「あの、人違いじゃないですか？」

「いや、お前だ」

「名前を確認して告白っておかしいですよね？」

「いや、お前が好きなんだ」

二度目の『好きだ』に、周囲の生徒は更に悲鳴を上げた。

「俺の耳は絶対に病気だ！！誰か医者を紹介してくれ！！」

「ああ神子様！嘘だと言ってください！お願いです」

「好きだったのにいい！毎日こっそり見ているだけで幸せだったのにいい！！！」

つかつかと少女は近寄ってきて、浩太の右手を掴む。

「ここはうるさいな。場所を変えよう」

（こんなところで告白して、場をつるさくしたのはアンタだろう！！）

内心動揺しながらも、目で訴える。しかし彼女は気にした様子もなく、校舎へと歩いて行く。浩太も引きずられるようにそれに続いた。校内へ土足で上がり、生徒玄関から北校舎へ。階段をひたすら無言で踏んで3階に到着しても、目の前の彼女に止まる気配はない。音楽室、美術室などの特別教室の前を通過して、廊下の行き止まりまで来たところで、浩太の手を引いていた人物は足を止めた。

「好きな人の傍にはずっといたい。と、いうわけで、私の作った『遊戯部』にぜひ入部してほしい」

何が、『と、いうわけで』だ。彼女の中では言葉の意味が繋がっているらしいが、さっぱり理解できない。好きだ 傍にいたい 部活入れ そしたら一緒にいられる、ってことか？そもそも、目の前の美人になぜ好かれているのかさえ分からない。

「あの、何で俺のこと
好きなんですか？」

質問しようとして、彼女の声に遮られる。

「まあ、とりあえず中に入れ」

突き当たりのドアに手をかけて開ける。途端、部屋にいた全員が目
がこちらに向く。

真ん中の大きな机の右側で、ゲームをしていた幼女。その横で、本
から目を離し浩太を見る少女。部屋の隅で立っている少年。3人と
も黙ったままだ。

「神子様」

不意に後ろから声がして視線をやると、長めの黒髪を上の方で一つ
に束ねた少女が、真面目な顔をして立っていた。

「彼に説明を」

「説明？」

「突然の事で、困っているようです」

「ああ、そうか」と、『神子』と呼ばれている少女は呟いた。

「ここは、『遊戯部』の部室だ。こいつらは部員。で、今日からお
前も部員だ」

（待て、待て待て。俺はいつ入部すると言った!?!）

そんなことを考えていると、右手を引く力は強くなり、足が部屋の
中に入りそうになる。

「ちよっ……ちよっと待って下さい!」

何とか入口で踏ん張ると、神子は不思議そうにこちらを見た。

最初から強引なことばかりだったが、浩太の方を見て、話を聞いて
くれるらしい。

「えーと」

言いたいことがあった。まずそれからだ。後で遊戯部でも何でも、説明を彼女に求めればいい。

浩太は、はぁーと息を吐いて、一番言いたかったことを口にした。

「土足なんで、下駄箱まで戻ってもいいですか？」

01話「好きだ」(後書き)

このお話は『勢い』でできています。主に神子の勢いで。

02話「よろしく」

下駄箱で、スニーカーから学校指定の上履きに履き替え、北校舎の3階まで戻る。廊下の突き当たりの部屋の前で、神子がドアを開けたまま待っていた。

「よし、入れ」

言われた通りに部室へ入ると、後ろで引き戸が閉まる音がした。

「まずは自己紹介だ」

神子は浩太の前に回り込み、腰に手を当てて胸を張る。

「河上神子、2年生。『遊戯部』部長だ。よろしく」

偉そうな美人だなというのが第一印象だったが、それは出会ってから数分経った今でも変わらない。言葉、態度、全てが偉そうだ。

「次は、小桃先輩お願いします」

待ってましたとばかりに、小さな少女がぴょんつと椅子から立ち上がり浩太の方を向いた。

「東郷小桃です！3年生で、先輩なので、敬ってねー」

『3年生』、その言葉に仰天した。

赤いプラスチクの球体がついたヘアゴムで、右と左で二つに縛つてある髪。茶色の大きな瞳。どう見ても小学生にしか見えない外見。年下だと思った。3年生と聞いた後でも、信じられない。

「遊戯部のー、副部长です」

驚いた様子の浩太をほったらかして、小桃はマイペースに自己紹介を続けた。

「小桃って呼んでね！」

目をキラキラさせて見上げる少女の勢いに、一歩下がる。

可愛い。一部のマニア受けのよさそうな可愛さだ。

「彩」

神子の一声で、浩太の右側にいた少女が一步進み出た。先程後ろから声をかけてきた、真面目そうな少女だ。

「柚木彩です。よろしくお願いします」

それ以上話すことはない、と言うように彩は頭を下げた。上の方で束ねた黒髪がするりと垂れる。

「彩は私と同じ2年で、クラスメイトだ」

素っ気ない彼女の紹介を付け足すように、神子が口を開く。

「昔からの友人で、私の護衛をしてもらっている」
護衛？

耳慣れない言葉が聞こえた気がする。なぜ普通の学生に護衛が必要なんだ。そんな疑問が浮かんだが、すでに次の部員の紹介が始まっていた。

「真島絹代です。よろしくお願いしますね」

小桃の隣に立っている少女が、ふんわりと微笑む。落ち着いた雰囲気。気の彼女は、見覚えがあった。

「真島さん、遊戯部だったんだ」

「あら？」

不思議そうに絹代は眼を丸くする。

「わたしのこと、ご存じなのですか？」

「…お、俺のこと知らないの？」

「すみません。記憶にないです」

申し訳なさそうに、彼女の眉尻が下がった。どうやら本当に知らないらしい。

（入学したばかりなら仕方がないけど、2か月も経ってまさか・・・

落ち込みつつも顔に笑みを張り付けて、自分も自己紹介することにした。

「真島さんと同じクラスの、沢村浩太です」

「そうだったんですか。すみません、覚えてなくて」

「いえ、いいんです。俺の影が薄いだけだと思うし」

内心そんなことは思っていない。クラスメイトの大半とは親しいし、毎日を騒がしく過ごしてきた。真島絹代と会話したこともある。

(そっか、覚えてないのか)

知っているのは自分だけ、というのは悲しかった。

絹代は、白い肌と艶やかな髪、そして慎ましい性格から、現代では珍しい大和撫子として密かに男子たちの憧れだった。男子の一人が彼女に話しかけただけで、クラス全員の男から睨まれる。女子は普通に絹代との会話を楽しんでいたが、男子には近づくこともできない高嶺の花だ。

一度、図書委員だった彼女に図書室の蔵書について尋ねたことがあったが、そのときの『お前、真島さんに話しかけてんじゃねえよ』という無言の男子たちの視線は、今でも忘れられない。

「よし、これで全員自己紹介は終わったな」

神子の声で、はっとして顔を上げる。どうやら自分は、ぼあっと思考の海に漂っていたようだ。

「ちよつと待て！」

突然、部屋の隅から声がして、一人の少年が飛び出してきた。

「オレにも自己紹介させるよ！」

「何だ、いたのか犬」

「犬じゃねええ!!!」

大声で否定しながら、少年はこちらを向く。

「三原祐平。2年生だ。よろしくな後輩！」

よく分からないが嬉しそうに、ニヤニヤ笑っていた。

「ありがとう、沢村！これで遊戯部の雑用が2人に増えるんだな！

！ああ、オレにもやつと自由な時間が……」

「バカを言うな」

神子が冷たい声で、三原を睨む。寒い。凍りそうだ。実際、睨まれた少年は凍ったように視線だけ神子に向けて、動かなくなった。

「私の愛しい人に、雑用なんかやらせるな」

ぎゅっと浩太は手を握られた。出会ったときに掴まれたのとは違い、優しい温かさだった。

「今日から、浩太は我が部の一員だ。つまり雑用のお前より立場は上だ。」

「え、沢村は1年だろ」

「だからどうした」

「え、オレより上なの？」

「そうだ」

そんなばかなああああ!!!

三原は叫びながら、首を振った。

「もう嫌だ、こんな部活やめてやる!!」
「ほう、いいのか?」

彩、と神子は呟いて、真面目な表情で隣に佇んでいた少女から、一冊のファイルを受け取る。青色のそれを見た瞬間、三原の顔から血の気が引いていくのが分かった。

「お前が産まれてからの全て。恥、屈辱、初恋の人。全てが、この中に入っている。……どうする? 屋上から、ばらまいてほしいのか?」

「ごめんなさいいい!! 何でもやります!! 犬でいいです!! でも、それだけはやめてくださいいい!!!!!!」

遊戯部部室に入ってから、6分。

浩太は、今すぐここを飛び出して家に帰りたいと思った。

02話「よろしく」(後書き)

登場人物1

河上 神子

(かわかみ かみこ)

遊戯部 部長

2年生

偉そう 美人 偉そう

好きなゲームは オセロ

03話「記入しろ」

恐怖で三原を黙らせ、青いファイルを隣の少女に渡しながら、神子はこちらを向いた。

「浩太」

嫌な予感がする。このままの流れだと次に何が起こるのか、安易に想像できてしまう。

心の中で、『帰りたい』『ここを出たい』と叫びながら、引きつった顔で返事をした。

「何ですか？」

「座れ」

入口近くの椅子を指差して、神子はスカートのポケットから一枚の紙を取り出す。折ってあったそれを丁寧に広げて、机の上に置いた。

「入部届けだ。今すぐ記入しろ」

うわーやっぱりそうなるのか。

座れと言われても動けないまま、浩太は壊れたロボットのようになり、チギチと首を動かして、遊戯部部长を見た。

「わおー、神子ちゃんって強引ー」と、小桃の楽しそうな声が入る。楽しくない。言われている本人は何も楽しくない。

椅子にも座らず、入部届けに記入もしようとしない浩太を見て、神子は首を傾げた。

「どうした？早くしろ」

「いや、あの…」

どうしても入らないといけないんですかと、尋ねたい。聞いたとしても、おそらく答えはイエスだろう。

「分かっていると思うが」

中々動かない浩太にしびれを切らしたのか、神子は真っ直ぐな瞳で告げた。

「お前のファイルもあるんだぞ」

瞬間、浩太は椅子に座って、入部届けにペンを走らせる。どうにでもなれ、そう思った。

「おい、審判」

『今日はもう帰ります』と言って、入部届けを書いた後、ふらふらしながら少年が部室から出て行ったの確認して神子は口を開いた。

「どうだ？浩太は誰に惚れた？私だろう。私に決まっている」

「いやいやちょっと待てよ」

三原は呆れた顔をしながら、近くの椅子に腰を下ろす。

「早すぎるだろ。今までの会話の中で、沢村が誰かに惚れる要素なんて一つでもあったか？」

好きだと告白してみたし、手だって握った。少しは自分にドキッと

したはずだ。

冷静に話す三原に、神子はムツとした。

「うるさい、喋るな犬」

「お前がオレに、聞いてきたんだろぅがああああ!!!」

ぎゃんぎゃん吠える犬は無視することにして、小さな少女に話しかける。

「小桃先輩、先輩はどう思います?」

「なにがー?」

手元のゲームに集中する小桃は、「おりやつ」とか「うがーつ」とか言いながら、ボタンを必死に連打していた。画面の中で、チャイナ服を着た女と着物姿の老人が戦っている。

「あの、小桃先輩?」

集中している時に邪魔するべきではないと考えたが、どうしても年上の彼女の意見が聞きたかった。待とうか、そう思ってから1分後。決着がついたようで、老人が勝利のポーズを決めているのが見えた。

「ふっふっふ、若者よ。急いではいけないよ」

芝居がかった笑い方をして、桃子はゲーム機をテーブルに置く。

「戦いも、恋も、焦った者が負けるんだよー」

「焦った者が負ける…」

なんとなく、同じ言葉を繰り返した。うんそうそう、と少女は頷いで、愛らしい茶色の瞳に神子を映す。

「神子ちゃん、ギャルゲーも乙女ゲーもやったんでしょ?」

「はい、やりました」

「主人公と攻略キャラが会って、一日目にお互い好きになる。…そんなことってゲームの中でもないよね?」

「無いですね」

別にお互い好きになる必要はない。浩太が誰かに惚れればゲーム終了だ。

「まあ、浩太くんが誰かを好きになれば終わりだけど、やっぱり一日では無理だよな」

「そうですか」

現実の時間で1時間でも、ゲームの中では何日も経過していたりする。やはり、それぐらい日にちを重ねなければだめなのか。どうやら考えていたよりも、このゲームは難しそうだ。

「今日は自己紹介だけだったけど、次からはあたしも本気でやるねー」
にやりと桃子が笑って、そういえばこの人はライバルだったと思いだす。

「負けませんから」

神子もにやりと笑って小さな先輩を見つめた。

翌日、登校した浩太を待っていたのは、友人たちの理不尽な暴力だった。

「さーわーむーらあぁー!!!」

と、叫びながらチヨークを投げってくるクラスメイトA。

「このやるおお!!」と、叫びながら机を投げってくるクラスメイトB。

「なんでお前なんだあぁー!!!」

と、叫びながら花瓶を投げってくるクラスメイトC。

その他にも、携帯電話、弁当箱、カッター、体操服、国語辞典など様々なものがこちらへ向かって飛んでくる。当たれば大怪我をしそうなものをギリギリで避けると、残りの危険度の低そうな物品が降ってきた。

弁当の梅干し、チョークの粉、汗臭い体操服、花瓶の水。机や国語辞典よりは危なくはないだろうが、当たるのは嫌に決まっている。しかし、ベチャツ、バシャツの音とともに、真っ白だったシャツは汚れていた。

(ああ、母さんに怒られる…)
自身の母親の怒り狂う姿を想像して、浩太の顔が青ざめる。気持ち悪い色に染まったシャツを見て何と言うだろうか。

だが、今さらどうしようもない。制服の汚れについては諦めて、この状況を整理することにした。

「…えーと、どうした？」

「どうした？じゃねえよ!!」

机をバンツと叩いて、クラスメイトの一人が眉間に皺を寄せる。よく見ると、浩太を囲んでいる男子たちは、怒っているような泣いているような不思議な表情をしていた。

「何でお前なんだ…」

「お…俺だつて神子さんと一緒に部活してえよ…」

「…うぐう、絹代さんと一緒に部活動がしたいのに」

「同じ部活で、彩先輩をずっと見つめていたい…」

「小桃先輩萌えー」

理解した。おそらく、自分への嫉妬だろう。

昨日会った彼女たちは、全員が美人もしくは可愛い部類の人間だ。

密かに憧れていた少女たちの傍に、突然現れた浩太のことが気に入らない。だから物投げちゃえーってことか。

「って、何でそうなる…」

理不尽だ。部活に入部させて下さい、と一回も頼んだ覚えはない。

それなのに巻き込まれた浩太のことを憐れむのではなく、「ずるい」と考え、責めるのはおかしい。

ガラッ

騒がしい教室へ、一人の少女が入ってくる。

「あら？」

困惑した表情でクラスメイトたちを見てから、その真ん中で汚れた制服のまま立っているこちらに視線をやった。

「どうしたのですか？」絹代は鈴のような愛らしい声で、疑問を口にする。

(どうしたもんかなあ)

余計にややこしい事態になりそうな気がして、浩太は泣きたくなくな

04話「本気だよー」

朝。見慣れた廊下を歩き教室のドアを開けたところで、異様な教室の空気に絹代は足を止めた。

「あら？」

何だかおかしい。教室の真ん中を囲むように男子たちが立っていて、女子は「関係無い」という顔で友人たちと話をしている。そして部屋を中心に見知った人物を発見し、絹代は声をかけた。

「どうしたのですか？」

戸惑ったようにこちらを見やる少年は、昨日遊戯部に加わった沢村浩太だ。

「真島さん……」

口を開いた彼の言葉を遮るように、クラスメイトの男子生徒たちが騒ぎだす。

「真島さん、こいつが『遊戯部』に入っただって本当ですか!？」

「どうしてそんなことに!？」

「嘘です…嘘だと言ってください!!！」

なぜ彼らはそのことを知っているのだろうか。浩太の入部は部員しか知らないはずだし、特別誰かに教えた覚えはない。浩太自身が彼らに言ったのだろうか、と考えて絹代は男子たちに目を向けた。

「浩太さんの入部は神子さんが決めたことです。不服があるのでしたら彼女に直接どうぞ」

途端に彼らは黙ってしまふ。名前だけで人を静かにさせてしまふのだからやっぱり神子さんは凄い。

「放課後、部室に集合してください、とのことですよ」

今朝送られてきた部長からのメールの内容を浩太に伝え、絹代は自分の席についた。

少しすると予鈴が鳴り、一人また一人と着席していく。一時間目の現代文の教科書を開いて今日の内容を確認しながら、ふと動きを止めた。

（それにしても……）

神子の提案したゲームには参加するつもりだ。彼女の考えにはいつだって賛成だし、拒否しようだなんて思ったことは一度もない。しかし、

（『誘惑』ってどうやってするのかしら？）

担任が教室に到着しホームルームが始まるまで、絹代はぼんやりと教科書を見つめていた。

放課後。大和撫子のお言葉で無事に授業を終えた浩太は、北校舎の階段を上っていた。あの後、男子たちからは文句を言われることは無かったが、冷たい目ですつと見られていたような気がする。まあ、物騒なものが飛んでくるのに比べればずつとましだ。

昨日のように特別教室の前を通り過ぎて、突き当たりの戸の前で立ち止まる。ノックしようか一瞬考えたが、無理矢理連れて来られたときや無理矢理入部届けを書かされたときのことを思い出し、少しイラつとしたので力任せに戸を引っ張った。

「あっ浩太くんだー」

机の上に広げていた本やノートをバタバタしまいながら、幼い少女

が嬉しそうに名を呼ぶ。どうみても小学生にしか見えない彼女は確か東郷小桃と名乗っていた。

「…えーと、東郷先輩？」

「のぉー！！小桃でいいって言ったのに」
怒ったように頬を膨らませて足をぱたぱたと振る様子はとても愛らしい。

「小桃先輩、あの、お一人ですか？」

部室には他に人がおらず、広めのこの部屋でぼつんと椅子に座っていたのは彼女だけだった。

「えへーそうだね。二人つきりだねー」

につこりと笑いながら、立ち上がった小桃はジリジリとこちらに近づいてくる。言い知れぬ不安を感じ、話をそらすことにした。

「きつ聞きたいことがあるんですけど」

「聞きたいこと？」

「はい、…その、遊戯部に入部してから言うことじゃないんですが」
「なあに？」

「……『遊戯部』って何する部活なんですか？」

昨日からずっと疑問だった。今まで耳にしたことのない部活名、自由すぎる部長、少ししか部活の様子を見ていないがまともに活動しているのか謎な部員たち。何かしら目的はあるのだろうか、まったくわからない。

「うーん、遊戯部はね」

そこで言葉を区切って腕を組んでから、小桃は思い出すように視線を上に向けた。

「世界中の遊戯…つまりゲームとか遊びの、歴史、ルール、面白さなどを調べ、より深く世界の事を知ろうって部活なんだけど。えーと異文化理解？みたいなの？」

意外と普通だった。

もつと変な活動内容を言われるのではないかとドキドキしていたので、内心安堵する。

「でも基本はお茶飲みながら、オセロしたり将棋したりかな。ゆるい部活だよー」

それでいいのか、と思ったが今までそれで部活が続いているのだから何の問題も無いのだろう。

入口でそのまま立っていたら「入って」と小桃に言われ、素直に従った。

戸を開けた正面には大きな窓と淡い水色のカーテン、左右の壁には様々な色のファイルがぎっしり詰まった棚が並んでいる。真ん中に木でできた大きな楕円のテーブルが置いてあり、同じ素材の6脚の椅子が周りを囲んでいた。

小桃は先程自分の座っていた席に戻り、隣の椅子をぼんぼんと叩く。どうやらここに座れということらしい。鞆をテーブルの上に置いてから腰かけると、真剣な表情で彼女は浩太を見つめた。

「神子ちゃんに告白されたんでしょ？」

何故それを知っている！？

部員の前で『愛しい人』とか恥ずかしいことを言われたが、それだけで気がついたのか。

「神子ちゃんから聞いた」

まるで心を読んだかのように答えて、膝に乗せてあった手にそっと触れられる。

「返事はどうするの？」

「まだ、…考えて…ないです」

突然告白されても神子と出会ったのは昨日が初めてだ。それに一方的に好きだと言われただけで、返事をくれとは言われていない。このままではいけないと思うので、近々断るつもりでいる。

「そつか…ねえ、あたしはどうかかな？」

「どうか、の意味が理解できないで桃子の顔を凝視すると、ふふつと笑われた。」

「あたしのこと、恋愛対象として見れない？」

え？

「……あの、冗談ですよね？」

「本気だよー」

座った浩太に、ぐつと体を近づけてくる。立ちあがった彼女より着席した自分の方が高くて、ちっちゃいなーこの人、とフワフワした頭でそんなことを考えた。

(いやいや、そんな、二日連続告白されるなんて……) 無い。絶対に無い。夢をみてるんだ。

小桃の顔がゆっくりと迫る。浩太の顔がゆっくりと引きつる。

「え、あ…ええ!？」

口から変な言葉が漏れて、体が強張った。ああ、もう逃げられないかもしれない。

そのとき、部室のドアが勢いよく開けられた。

「浩太!！」

少し怒ったように入口に立っている河上神子。

その後ろには、興味なさそうにこちらを見つめる彩と、興味津津でこちらを見つめる三原。

「あれー早かったね、神子ちゃん」

小桃は無邪気にそう言つと、浩太の頬に唇を押し当てた。

04話「本気だよー」（後書き）

登場人物2

沢村 浩太

（さわむら こうた）

主人公 1年生

遊戯部には無理矢理入部。

神子のせいでモテモテに。

好きなゲームは 脱出ゲーム

05話「惚れたのか？」

「うわあ、東郷先輩ってば大胆ですねえ」

三原の発言にはっとして、浩太は自分の頬が熱くなるのを感じた。

「…先輩」

神子がちらを睨んでいる。正確には隣に立つ小桃を睨んでいる。

「抜け駆けですか、ひどいですね」

「そんなことないよー、神子ちゃんだって先に浩太くんに告白したよね？」

小桃はニコニコしながら、入口に近寄り「みんなでお茶しよーよ」と、神子の手を引っ張った。その後ろにいた彩と三原に中に入るよう促し、部室の戸を閉める。

「おい、犬」

低く唸るような声に、三原の体がびくりと反応した。

「なっ何だよ…」

「浩太は…小桃先輩に惚れたのか？」

「いや、惚れてないだろ」

「何故、そう言える？」

「……本人に聞いてみれば？」

三原から浩太へ顔を向け、神子は眉間に皺を寄せる。怖い、顔がむちゃくちゃ怖い。そのままゆっくりとこちらに向かってきて、がちりと肩を掴まれた。

「好きなのか？浩太は小桃先輩のことが好きなのか？」

「え？」

「好きなのかと聞いている、答える」

「すっ好きじゃないです……」
ちっちゃいし、愛らしい先輩だな、とは思うがそれが恋愛感情かどうかと問われれば否である。大体、自分はロリコンではない。あの小さな先輩を恋愛対象として見ることはできなかった。

「そうか、なら私にもまだチャンスはあるんだな」

ホツとした表情で、掴んでいた手の力を緩め、神子は浩太と目を合わせる。少し茶色がかった瞳に見入っていると、甘い香りに鼻腔をくすぐられた。香水だろうか。

「……浩太」

おもむろに顔を近づけ、肩にあった手を浩太の頬に添える。

そして、優しく唇が ……

「すとおー……っぷ！……！」

触れるか触れないかのギリギリの距離。咄嗟に叫んだ幼い少女の声で、神子の動きが止まった。

「……小桃先輩、邪魔しないでください」

「邪魔してないよー、ストップって言うただけだよー」

迷惑そうな視線は無視して、小桃は神子の腕を掴み、ぐいぐいと引き離す。

諦めた顔をして後ろへ下がった神子は、隣にいた少女へ目を向けた。

「彩、……すまないが紅茶を淹れてくれ」

「はい、了解しました」

真ん中のテーブルの横に教室で使っているような机が置いてあり、その上に真っ白なポットとインスタントのコーヒーや紅茶が並べられている。

アールグレイと書かれた箱を手に取ってから、彩は顔を上げた。

「みなさんは、何か飲まれますか？」

少し考えるような間があつて、小桃と三原が返答する。

「はい！あたし、キャラメルカップチーノ！」

「オレはコーヒー」

彩は頷いてから、

「沢村、あなたはどうしますか？」と浩太に尋ねた。

（『沢村』って呼び捨てにしたのに何で敬語なんだ！）

戸惑いながらも「おつ俺は紅茶にします」と答えて、ふと変な顔で何か考えごとをしている神子に気がついた。

「なあ、絹代はまだか？」

顎に手をあててぼつりと呟いた神子に、小桃も変な顔をする。

「うーん、遅いね絹代ちゃん。いつもならあたしのすぐ後に来るのに」

「あ、あの」

忘れていた。そういえばここに向かう前に、絹代に伝言を頼まれたのだ。

突然立ち上がった浩太に、部員の視線が集まる。

「用事があるから終わったらすぐ行く、って真島さんが言っていました。伝えるのが遅くなってすみません」

「……『用事』か……」

神子はその言葉にニヤリと笑う。

「たぶん手紙かなにかで呼び出されたんだらうな」

「あたしもそう思うー、きっと告白だね」

二人の話には少し驚いたが、絹代が男子からよく告白されていると
いうのは聞いたことがあった。

美人で、勉強もできて、誰にでも優しい性格。これでモテない方が
難しいだろう。

「よし、決めたぞ」

彩の淹れたアールグレイを受け取りながら、神子は瞳をキラキラさ
せて宣言した。

「遊戯部本日の活動内容は、『絹代に告白する男子を観察し、その
様子をレポートにまとめる』だ！」

06話「この人です」

それぞれ自分が頼んだ、紅茶・キャラメルカプチーノ・コーヒーを飲みほして、遊戯部の部室を出た。先頭は神子、その後ろに彩、三原、小桃、浩太と続く。

「真島さんが、どこにいるかわかるんですか？」

迷わずどこかへ向かう神子へ問うと、前を歩いていた小桃が振り向いた。

「あれー？浩太くん知らないの？」

不思議そうに口にしてから、「あ、そうかまだ入学して2カ月だもんね」と一人で納得して、大変胡散臭い紅葉学園の伝説について語りだした。

「この学園には、『北校舎裏で告白をして相手がOKすれば、その2人は一生幸せに暮らせる』って伝説があってね。あたしのお姉ちゃんも校舎裏で告白されて、相手の人とラブラブな結婚生活を送ってるよー」

「そんな訳で、紅葉学園で告白する場所といえば一つしかない」

小桃の説明に満足そうに頷きながら、リズムカルに階段を下りる神子。

生徒玄関で靴に履き替え、初夏の風を感じながら校舎の傍らを突き進む。

五人が並んでどこかに向かう様子に、放課後も残っていた生徒たちの好奇の視線が集まる。

「うわ、遊戯部だ」「珍しいーどこに行くんだらう？」学校指定の体操服姿の女子　おそらく運動部だらう。彼女たちはこちらを見

ながらひそひそと何やら話をしていた。

周りを気にすることなく、神子はどんどん人気のない北校舎の裏に近づいていく。その時だった。

「あのおつ俺と付き合ってください！」

必死な声が、前に見える茂みの先から聞こえる。先頭の部長が慌てて駆け出し、残りのメンバーもそれを追った。鮮やかな緑色の植物を手で左右に押し分け、そつと声のした場所を窺うと、少し離れたところに男子生徒の後ろ姿と絹代の姿が確認できた。

灰色の校舎を背景に周囲を緑に覆われたその空間は、2人が立つ所だけコンクリートで埋め立てられ、草は一本も生えていない。学園の喧騒が届かない、告白するために作られた舞台のようだ。

「『付き合っ』ですか…?」

困ったように眉根を寄せて、絹代は男子生徒を見つめている。

ごくり、と右隣で喉を鳴らす音が聞こえたので顔をやると、神子が真剣な表情で2人に注目していた。彩は冷めた目で、小桃と三原はきらきらと面白いものでも見るような目で同じ光景を眺めている。

「すみません」と小さな謝罪が耳に入り、浩太は急いで視線を元に戻した。

「これから部活ですので、どこかにお付き合いする時間はないんです」

違うたる!!

この場合の『付き合う』は人と行動をとともにすることではなく、男女交際の『付き合う』だ。絹代のあまりにも空気を読まない発言に内心ツッコむ。

神子と浩太以外の部員はこうなるのを予想していたようだ。

「さっすが絹代ちゃん。期待を裏切らない!」

「東郷先輩、そんなに笑ったらあの少年が可哀相ですよ」

小桃は必死で笑いを噛み殺そうとしているができておらず、さほど可哀相と思っていないのか三原は笑いながら地面をばしばし叩いていた。

告白シーンを誰かに見られているなどと考えていない男子生徒は、「違います!」と叫びながら絹代に詰め寄る。彼女の体がびくりと震えた。

「真島さんのことが好きなんです! 入学式で見たときから好きだったんです! だから今好きな人がいないなら俺と付き合ってください!」

一生懸命に想いを伝えることで手一杯の彼は、目の前の少女の泣きそうな顔を知らない。絹代はどうすればいいのか分からないようで、「え、あ、わたしは…」と瞳を潤ませていた。

「ここまでだな」

隣でぼつりと神子が呟いて、後ろにいた黒髪の少女が反応する。

「彩、頼めるか?」

「お任せ下さい」

彩は浩太の横を通り過ぎ、前の2人に向かってゆっくりと歩いていく。そのことに気がつかない男子生徒は、絹代に「好きです！」と相手の目も見ないで繰り返していた。

弱った表情で体を強張らしていた絹代は、近づいて来る人物の姿を認めて安堵したように笑みを浮かべる。

「……彩さん」

その声に、ベラベラ喋るのを止めた男子生徒は振り向こうとして「ひいつ」と小さな悲鳴を上げた。

カチャリ

黒く輝く何かを少年の頭に突きつけ、無表情のまま彩は口を開く。

「真島が困っています。少し落ち着いて下さい」

それはお願いではない、脅しだ。

刑事ドラマでしか見たことがないが、彩の手に握られているのは拳銃。
銃。

男子生徒の頭にぐりぐり押し付けているのは拳銃。凶器だ。

浩太は自分の顔が青ざめているのが、鏡を見なくても予想できた。

「そつだ、落ち着け少年」

茂みから出た神子、小桃、三原は平然と彩の傍に立つ。少し遅れて浩太もその空間に足を踏み入れたが、彩の近くには行きたくなかった。

「絹代、大丈夫か？」

心配そうに尋ねる神子に、彼女はこくりと頷く。

そして、しっかりと前を向いて男子生徒と視線を合わせた。

「あの、わたし好きな人がいるのです。だからあなたとお付き合いはできません」

ごめんなさい、と頭を下げて絹代は謝る。それに驚いたのは告白してきた少年だけではなく、遊戯部の残りのメンバーだった。

「きつきつ 絹代……お前好きなやつがいたのか!？」

「初耳だよつ 絹代ちゃん！」

神子と小桃がそのことが信じられないのか騒ぎ、三原はぽかんと口を開け、あの彩さえも目を丸くして驚いている。

「すつ好きな人って誰ですか？」

後頭部に銃を押し当てられたまま、怖々男子生徒は口にした。

その後のことは、一生忘れないだろう。

微笑みながら傍に寄ってきた絹代が、浩太のシャツをくいと引っ張る。

「この人です」

瞬間、場の空気が凍りついた。

07話「ハーレムだぞ」

「……そうですか」

誰も動こうとしないその空間で、最初に言葉を発したのはあの男子生徒だった。

諦めたように俯き、後頭部に押し付けられた黒光りする凶器からそっと離れる。その動きに気がついた彩が拳銃を下ろした。

「その、自分の事ばかりで……真島さんの話を聞こうとしないで、ごめんなさい。……どうぞお幸せに」

それだけ言って少年は駆け出す。彼が横を通り過ぎた時に、目が涙で光っているのが浩太には見えた。

本当に絹代のが好きだったのだろう。

告白する姿は真剣で、自分の気持ちを伝えようと必死だった。

だが……

「絹代、本気か？」

困惑、そんな感情を顔に張り付けて、神子は立ち尽くしている。

小桃と三原も同じような表情をしていた。

「いえ、わたしは遊戯部ですから」

ふんわりと髪を揺らしながら絹代は笑う。意味が理解できないでいる部活メンバーに、彼女は更に言葉を続けた。

「神子さんのゲームなら、全て参加します」

浩太にはさっぱり分からなかったが、4人はそれで何かを悟ったようだ。「そうか、じゃあ絹代もライバルだな」と、途端に上機嫌になる神子。「うわぁー、あたしも負けてられないな」と、何故か

浩太の手をしつかり握る小桃。「頑張れ、沢村」と、引きつった顔の三原。彩は相変わらずの無表情だが、北校舎裏は部員たちの騒がしい声で満たされた。

「えーと、柚木先輩？」

怖いと思いながらも彼女に話しかけると、「彩で、構いません」と言われたので「彩先輩」と、もう一度名を呼ぶ。

「その拳銃、本物ですよね？」

本当はこんなこと聞きたくなかった。しかし、法律に違反しているような行為は見逃せない。……本音は、「法律に違反している人がいる部活にはいたくない」だが。

「ああ、これですか」

植物が生い茂ったこの場所の日当たりはあまり良くないが、空からのわずかな光を浴び漆黒の凶器は鈍く輝いていた。容易に人の命を奪えるそれはどこまでも冷たく、楽しげな生徒たちで賑わうこの学園には似合わない。

「拳銃ではありません」

「……は？」

「ただの水鉄砲です」

みずでっぼっ？

予想外の物の名に、改めて彼女の手にある黒い凶器を見遣る。

浩太に真実を教えるためか、彩は腕を少しだけ持ち上げ拳銃の引き金を引いた。

びゅっ

透明の液体が飛び出して灰色のコンクリートを濡らす。恐怖の武器と思い込んでいた物が子供の玩具だったことに驚いたが、それよりも何故そんな物を所持しているのか疑問がわいた。

「……何でそんなもの持っているんですか？」

「神子様を守るためです」

水鉄砲で一人守れるのか怪しいものだが、彩の言葉はどこまでも真剣だ。その話には深く立ち入るのはやめて、昨日から心の中にあつたもう一つの疑問を彼女に問うことにする。

「河上先輩と彩先輩は同級生ですよね？でも護衛って……」

その先は、「河上ではなく、下の名前で呼べ！」と神子に遮られた。どうして「この部員は名字ではなく名前で呼ばれたがるのだろうか。

「ねえねえー浩太くん。『ウイート』って知ってる？」

今までの話の流れを切るように、浩太の手を握っている小桃に尋ねられた。質問の意味を考えてもよく分からなかったのでとりあえず返事をする。

「えっと、小桃先輩の言ってる『ウイート』ってファミレスのことですか？」

『ウイート』は全国的に有名なファミリーストランダムだ。多彩な料理と手頃な価格から年齢や性別に関係なく多くの人に人気がある。それが一体どうしたというのだろうか。

「あのねー、神子ちゃんのお父さまはね『ウイート』とか他にもいっぱい飲食店を経営してるの。まあ要するに、神子ちゃんは『お嬢様』ってことだね」

「カワカミグループのトップの娘だから、必然的に護衛がいるんだ。こっに見えても彩は強いぞ」

小桃、神子からとんでもない話を聞かされ、浩太の頭はパニック状態だった。

近場の飲食店は大抵カワカミグループの系列店だ。その一番偉い人の娘がまさかこんな近くにいるなんて考えるはずもない。

（そういえば、先輩の名字は河上か……）
だが同じカワカミだということに気がついて、神子とカワカミグループを結び付けることはなかっただろう。

「浩太、私と付き合えば色々とおいしい思いができるぞ？」

「神子ちゃんそれは卑怯だよー、浩太くんはあたしを選んでくれるよね？」

「浩太さん、わたしのこと好きになってくれませんか？」

左の腕にぐいぐい胸を押しつけてくる神子（思ったより胸がでかい）、右手にするつと指を絡めてくる小桃（ちっちゃくて守りたくなるような手だ）、正面からシャツをクイツと引つ張る絹代（上目づかいが非常に可愛い）。彼女たちに体を好きにされぐらぐらと揺れる視界の中で、助けてもらおうと他の2人の姿を探す。

「いやあ、大変そうだな」

「そうですね」

自分たちは無関係だ、という顔をして少し離れたところに立っている三原と彩を発見した。

（たっ助けてください……）

目で訴えてみても2人はまったく動こうとしない。彩は興味なさそうにこちらを見つめ、三原はぐつと親指を立てて笑顔で言い放った。

「やったな沢村。ハーレムだぞ」

その言葉に、羨む響きがまったく感じられなかったのは何故だろうか。

07話「ハーレムだぞ」(後書き)

登場人物3

柚木 彩

(ゆずき あや)

遊戯部 部員

2年生

神子の護衛 武器は水鉄砲

好きなゲームは 将棋

08話「どうか」

「……………はあ」

浩太は溜めた息を吐き出し、自室のベッドに腰掛けた。

今日は朝から色々ありすぎて頭が混乱している。教室に入れば物を投げられ、男子に冷たい視線で非難され、午前午後は何とか耐えてやっと放課後だと思っただら小さな先輩に頬にキスされた。その後で遊戯部部长にもキスされそうになり、告白の様子を観察という謎の部活動中に大和撫子に告白された。

無茶苦茶だ。今まで生きてきた中でこれほどまでに悲しいのか嬉しいのか判断するのが難しい日は体験したことが無い。

落ち着いて出来事を整理しようと帰宅したが、世の中そんなに甘くなかった。

「浩太！！」

普段は柔らかく微笑み、趣味のガーデニングと家族を誰よりも愛する母の顔は怒りで染まっていた。原因は朝クラスメイトたちに様々な物を投げられ、とんでもない色になってしまった学校指定のシャツ。そのまま玄関から風呂場へ連行され、石鹸で手洗いして汚れが落ちるまで出てくるなどドアを勢いよく閉められた。

(……………今夜、晩飯食えるかな……………)

何とかシャツを洗い終わり母親に手渡したが、彼女はまだ怒っているようで一言も口を利いてくれない。もしかしたら夕食も自分で作れと言われるかもな、と思いつながら2度目の溜め息を吐く。同じ姿勢で作業をしていたせいか、体中がだるく感じられた。

それにしても、自分が何をしたというのだろうか。

神子に告白されてから、今までの平穩で楽しい学園生活が180度違うものになってしまった。これが噂に聞くモテ期なのか、と喜ぶ気分にもなれずベッドの上でただ時間だけが過ぎて行く。

河上神子

遊戯部部长 浩太に初めに告白してきた派手な美女。

赤茶色の長くふわふわとした髪が印象的で、道を歩けば誰もが振り返るだろう。

東郷小桃

可愛くて、守ってあげたくなるような小さい先輩。

赤いプラスチックの球体で髪を二つに縛った姿は、彼女を余計に幼く見せた。

真島絹代

男子たちの憧れの大和撫子。

白く華奢な身体、優しい微笑み、何もかもが完璧な美少女。

どうして、何故

そんな言葉ばかりが浩太の脳内を埋め尽くす。

自分は整った外見をしているわけでも、運動神経がいいわけでも、勉強ができるわけでもない。突出した才能もなく、どちらかといえば平凡な存在。だが彼女たちは浩太のことが好きだという。出会った初日、もしくは翌日の告白。違和感、どうもしっくりこない。

「まあ、しばらくすれば俺のことなんか忘れるだろ」

美少女たちの単なる気まぐれ。

そう思うことにしてベッドに寝そべり、浩太は瞼を閉じた。

絹代の告白騒ぎがあった次の日、遊戯部の部室にはいつものメンバーが集まっていた。しかし2日前に入部した沢村浩太の姿はそこにはない。

神子が無理矢理聞き出した浩太の携帯のメールアドレスに「本日の部活は中止！」と送信したため、彼は帰宅したはずだ。

「さて、沢村浩太についてだが」

一番奥の窓際に座っていた神子の声で、彩は意識をそちらに向けた。

「あの様子だと、まだ誰にも惚れていないようだな……審判としてどう思う、犬？」

犬、という言葉に一瞬反応したものの、否定したところで無駄だと分かっているのか三原はその部分に触れなかった。

「そうだな……、突然3人から告白されて戸惑ってるって感じか。

他の男なら喜びそうな状況だけだな」

「手強いよねー、あたしチューまでしたのにー」

ぷうっと頬を膨らませる小桃に、絹代が頷く。

「『この人です』 だけではだめでしたね。もっと好きだと言った方が良かったのでしょうか？」

部屋にいる全員が口をつくむ。それぞれ何か考えているようだ。

そもそも、恋とはそんなに簡単なものなのだろうか。

神子がこのゲームを提案したときから、彩の中では言葉にできない想いがぐるぐると渦を巻いている。

沢村浩太が自分のことをゲームの駒だと知らぬまま誰か1人を好きになっただら？ もしくは彼女たちが沢村浩太に惚れてしまったら？

ただの遊びごとの恋に真剣になって、友人たちに傷ついてほしくなかった。

神子を絶対とする彩は、彼女に反対することができない。

やんわりと注意することもあるが、本気で神子の意思を止めようとしたことはなかった。

「あの、神子様」

気がつくくと、口が勝手に動いていた。そのことに自分でも驚きながら、真っ直ぐ彼女の瞳を見つめる。

「ん、どうした？」

「……もし、沢村が部員の誰かを好きになったらどうなさいますか？」

「決まってるだろ、惚れさせた者が勝ち。『部員全員に何でも一週間命令できる権利』を与える」

違う。そんな答えを求めてはいなかった。

神子に質問の意図が伝わらないことがひどくもどかしい。

「……………そうではなく、彼が好きになったのが神子様だったら、神子様はどうなさるのですか？」

彼女は悩まなかった。そんな聞くまでもないことを聞いてどうする？と言いたげな様相ではつきりと言葉にする。

「浩太が私に告白してきたら、断るだろうな」

好きでもない奴と付き合えるか、と続けて、神子は2人の少女とどうやって浩太を惚れさせるか話し合いを始めた。

場合によっては幸せな結末が待っているかもしれない。

浩太が小桃か絹代のどちらかを好きになって、彼女たちのどちらかも彼のことを好きになれば何の問題もないのだ。

しかし片思いなら、『ゲーム』という辛い現実しか残らないだろう。

……神子はどちらもだめだ。

片想いも、両想いも。きつと逆らえない大きな存在に邪魔されてしまふ。

どうか、誰も恋なんかしないで。

神子の始めた恋愛ゲームの行方は決められないと理解していたが、それでも彩は願わずにはいられなかった。

08話「どっか」(後書き)

次からは第二章「遊戯部の日常」が始まる予定ですが…

予定は未定…良い言葉ですね。

09話「お帰りなさいませ」

遊戯部に入部してから10日後。「好き」を連呼しながら迫る女子部員たちに浩太は慣れつつあった。今日も部室のドアを開けた瞬間に神子に抱きつかれ、胸を押しつけられる。その横から現れた小桃が浩太の足に腕を回し、ぴとっと背中緞代が寄り添う。

「……離してくれませんか？」

「嫌だ」

「無理だねー」

「お断りします」

好意を寄せる相手に拒否権ぐらい与えて欲しい。最初の頃は触れてくる彼女たちに戸惑いながら頬を赤く染めていた浩太だったが、何日も続けばさすがに慣れた。助けてくれない冷たい先輩2人にも。

部屋の真ん中に鎮座するテーブルの左側で緑茶を飲む彩と、その隣で雑誌をめくる三原。こちらを見ようとせせず、お茶の味と雑誌の内容に夢中のような。

「なあ、柚木。今からオレが言うことに正直に答えろよ。『あなたは周りを4つの扉に囲まれた小さな部屋にいます。扉の色はそれぞれ赤色、青色、黄色、緑色です。その中であなたは赤色の扉を開けました。するとその先に誰かが立っています。誰が立っていましたか？』」

「何ですか、それは」

「いいから、答えろよ」

三原が彩に聞いているのはおそらく『心理テスト』だろう。雑誌のどこかのページにそんなコーナーがあるらしく、三原は紙面に視線を落したままだった。

「……神子様ですかね」

「なるほど。『その人物はあなたにとって最も大切な人です。自分の全てを捧げてもいいとあなたは思っているでしょう。しかし、一方的な愛情は相手を困らせてしまいます。適度な距離を心がけましょう。』……だってさ」

「そうですね」

「よかったなー河上。柚木に愛されてるぞお前」

どうでもよさそうに言って、三原は雑誌を机に放り投げた。暇つぶしの心理テストに面白い反応がなかったのでつまらなそうだ。

「当然だ。私も彩を愛しているからな」

恥ずかしがることもなく、さらっと神子の口からそんな言葉が出る。浩太に「好きだ」と言うときも彼女はこんな感じだ。普通はもっと照れると思うのだが。

「ありがとうございます」

彩はいつもの無表情で、神子と同じく照れた様子はなかった。

「彩だけじゃない、小桃先輩も絹代もみんな愛してるぞ。一番愛しているのは浩太だけだな」

「え、オレは？」

「犬として愛している」

「……ハハハ、ソウデスカ」

棒読みで笑ってから、がくりと三原は項垂れる。自分と同じ男である先輩に、「同情」という名の感情を浩太は抱くようになっていた。

「とにかく私は全員の事を愛し、大事にしてるぞ？彩にはいつも感謝してるし、犬には入部祝いに首輪をプレゼントしたし、小桃先輩が部活に入ったときは焼き肉パーティーだったろ？絹代のときは

……」

そこで言葉を切った神子は、はっと何かに気づいたように抱きついている腕の力を強める。

「浩太が入部したのに歓迎会をやってない！」

いや、別にしなくていいですから、と浩太が口を開く前に神子は身体を離し、テーブルの上に置かれた自身の鞆から携帯電話を取り出した。何度かボタンを押す音が聞こえ、それを耳に宛がう。

「あ、私だ。今から言うものを今日中に用意して欲しい。まず、メイド服と……」

そこから先は頭が拒否して先輩が何を言ったか覚えてない。歓迎会に必要ないだろ、と思わずにはいられない物ばかりだった気がするが、覚えていないのだから「気がする」だけだ。

電話を切った後、明日の歓迎会の相談をするからもう帰れと神子に

言われて、浩太は部室の外にぺいっと放り出された。啞然として閉じられたドアを見てみると、引きつった顔の三原が廊下に出てくる。その手には中に置いたままだった浩太の鞆が握られていた。

「……まあ、頑張れよ」

それだけ言っただけで鞆を渡し、彼は部室に戻る。

……何を頑張ればいいんですか？

誰かに問うこともできず、疑問は浩太の中で渦巻くことになった。

翌日

放課後になった途端絹代に、「行きましようか、浩太さん」とふんわり微笑まれ、逃げることもできずに遊戯部部室の前まで来てしまった。

「準備があるので少し待っていてくださいね」と部屋の中へ消えた絹代。そのときわずかに開いたドアの隙間からピンク色の空間が見えた。朝から黒板を見続けて目が疲れているようだ。部室の壁紙やカーテンがピンク色になっているなんてそんなバカなことありえない。……ない、絶対にない。

しばらくすると神子、彩、三原がやってきて、準備が終わるまで待っている、と部室へ入って行った。小桃は浩太や絹代より先に到着していたようで、中から幼い少女の喜ぶ声がする。何故喜んでいるんだろう、とドアに耳を付けるとこんな会話が聞こえてきた。

「うわーカワイイ！あたしこれ着てもいいの？」

「はい、小桃先輩のために作った物ですから。絹代、これはお前の分だ」

「シンプルで素敵なデザインですね」

「家で働いている女たちの服よりは、スカートも短いしフリルも多いけどな」

「ねえー早く着ようよ」

「そうですね。…でもその前に」

気配を感じて浩太が身を引くと同時に、勢いよく開けられたドアから人が飛び出してくる。「ふぎゃっ」と悲痛な声、というか鳴き声を発して冷たい廊下で転がっていたのは三原だった。

ガンツと大きな音がして視線を前に戻すと、ドアは全てを拒むようにしっかりと閉じられていた。

10分経っても着替えは終わらないらしく、浩太たちはその場に座り込んで呼ばれるのを待つ。その間、音楽室や美術室に部活をしにやってきた生徒たちに怪訝そうな顔で見られるのは正直辛かった。

「……三原先輩、どうして遊戯部に入ったんですか？」

嫌な空気をごまかすように三原に声をかけると、彼は大きく伸びを

して立ち上がる。ずっと座ったままいることに疲れたらしい。

「お前と似たような感じだよ。河上に告白はされてないけどな」「……脅されたんですか？」

「ああ、とんでもない所を目撃されて仕方なく入部したんだ……」

『とんでもない所』というのは気になったが、それを尋ねる前に部屋の中から「入ってもいいぞ」と神子の声がして、浩太はゆるゆると立ちあがった。

少し緊張しつつドアに手を掛ける。俺のための歓迎会なんだ、きっと楽しいに違いない、と自分に言い聞かせてゆっくりとドアを右に引くと………

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

壁紙もカーテンもピンク色に変わっている部屋で、メイド服姿の神子、小桃、絹代がニッコリ笑っていた。

09話「お帰りなさいませ」（後書き）

第二章「遊戯部の日常」がスタートしました。心理テストはでたらめなので信じないでください。

次の後書きは小桃の紹介をするつもりです。

10話「何だつてしますよ」

「ご主人様、ほらあーんってしろ…あ、間違えた。お口を開けてくださいませ」

「ごしゅじんさまー、プリンがいいですかニヤー？それともアイスがいいピヨン？」

「あら、ご主人様…：…どうかなさいましたか？」

昨日部室を追い出されたときはこんなまっピンクの空間では無かったはずだ。淡い水色のカーテンは一夜にしてシヨッキングピンクに変わっていたし、落ち着いた白い壁紙は所々にハートが散ったサーモンピンクの壁紙になっている。

部屋の中央にある楕円のテーブルには純白のテーブルクロスが掛けられ、その上にケーキやらプリンやらアイスやら…：…見るだけで胸やけしそうな甘いものばかりが並んでいた。

「このパフェは『フィート』の新作だぞ…：…新作ですわご主人様」
「むぐつう…！」

大きなスプーンにクリームを山盛りすくって、神子はそれを浩太の口に突っ込む。

「あたしのも味わってーごしゅじんさまー」
「ぐへっえ…！」

パフェに添えられていたマンゴーを掴んで、小桃はそれを浩太の口に押し込む。

「お飲み物はどうですか？」

「どばっあー!!」

テーブルの上に置かれた陶磁製の器の中身を、絹代は浩太の口に流し込む。

「なるほど。あれが『はーれむ』と呼ばれるものですか」

浩太から少し離れた場所で彩がいつもの制服姿で立っている。皺一つないシャツにきつちりと結ばれたネクタイ、校則通りの膝下まであるスカートは彼女の真面目な性格を体現していた。その隣でくたつとしたシャツを着て、ネクタイもしていない少年は可哀相なものを見る目で浩太を見つめている。

「……あれはハーレムじゃないだろ」

ハーレムってのは、もっとアハハウフフしたピンク色で……と三原は横にいる少女に力説していたが、彩は「ああそうですか」と返すだけだった。

(そうだよな、これはハーレムじゃないよな)

浩太は口内の甘味をなんとか咀嚼しながら、手で「もういらぬです」と訴えた。そのお陰で神子たちの動きは止まったが不満そうな顔をしている。

メイド服姿の彼女たちは、入室した浩太を無理矢理座らせると次から次へとカロリーが高そうなスイーツを食べさせた。甘いものは苦手ではないが、こんな大量のパフェやケーキを食べれば誰だって気分が悪くなるだろう。テーブルの端には空になった食器が重ねられ、その上に乗っていたものを全部自分が摂取したのだと思うと無性に吐きたくなつた。

これが好きな男相手にすることか。違っだろ、どう考えても嫌がらせだろう、としか思えないのだが、神子や絹代の顔はどこまでも真剣でこうすれば浩太が喜ぶと信じているようだ。小桃は目が合うとニヤリと笑っていたのでわざとかもしれない。

「もう食べないのか？……えーと、お召し上がりにならないのですか？」

いつもの男らしい口調を丁寧な言葉遣いに変えようと、神子は口を開くたびに変な顔をしている。

「……いらぬです」

ぐったりとした浩太の背中を、「大丈夫ですか？」と心配そうに絹代が撫でた。先程は先輩たちと一緒に浩太の口に甘いものを運んでいた彼女だったが、その優しさにはほろりと涙がでそうなる。

袖口が膨らんだ黒のスカートと程よくフリルのあしらわれた白いエプロンを着た神子や小桃は角や尖った尻尾の付いた悪魔に見えるのに、同じ姿をした絹代は背中には純白の羽、頭上には輝く輪を浮かべた天使のようだ。

「……すみません、ご主人様の気持ちも考えずケーキやプリンばかり……」

昔、放課後の教室で「絹代さんは俺たちの天使さっ！」と叫んでいるバカがいたが、今ならそのバカの言葉が理解できる。ということ。は自分もバカなのかもしれない。

「きつと、洋菓子よりも和菓子が好きなのですね？次からはそちらを用意させます」

絹代の『勘違い』を甘く見ていた。

以前男子生徒に付き合ってくださいと言われ、「あなたに付き合つてどこかに行く時間はないです」と答えていた彼女のことだ、洋菓子を拒む浩太の様子を「甘い物はもう欲しくない」ではなく、「洋菓子より和菓子の方が好きだ」と誤解しても無理はない。

(…………いや、無理あるだろう。)

自分ならそんな勘違いは絶対しない。断言できる。

「そうかーごしゅじんさまは和菓子が好きなのかー」

どこまでも純粹そんな笑顔で小桃は持ち上げていたスプーンを皿に戻した。しかし忘れてはいけない。甘味に翻弄される浩太を彼女はニヤリと笑って見ていたことを。

「神子ちゃん。次はいっぱいおまんじゅう持ってこようね」

「そうですね。浩太が喜ぶなら私は何だってしますよ!」

浩太の気分を更に悪くするようなことを言いながら、神子と小桃はテーブルの上にある残りのケーキやパフェを食べ始めた。そつと席を立ち、なるべく音を立てないようにしながら、浩太は三原や彩がいる壁際に逃げる。6人しかない部屋では誰かが動けば絶対に気がつくが、神子と小桃は甘い物に夢中らしくこちらを見ていない。絹代も「田島屋のどら焼きがいいかしら……」と和菓子で頭がいつぱいのようだ。

「沢村、もう諦めて誰か選んだらどうだ?」

「選ぶ……ですか?」

その意味が掴めず困惑した表情で三原を見つめると、彼はテーブル

の周りにいるメイド服の少女たちを指差した。

「好きだって言われただろ？この3人は答えを聞くまでお前にへばりついて離れないぞ」

「それは…困ります」

「だったら決めればいい、河上か、東郷先輩か、真鳥か」

「えーと、じゃあ断り…」

「あ、誰も選ばないってのは無しな。あいつら認めないと思うから。特に河上が」

自分の選択した答えをばつさり切られて、浩太は黙り込んだ。

神子、小桃、絹代、彼女たちは美人だし可愛い。この中の誰かを彼女に選べば、学校中の男子から羨ましがられるだろう（殺されるかもしれないが）。

だが容姿を理由に好きでもないのに付き合う、それは自分の事を好きだと言ってくれている彼女たちに対して失礼ではないだろうか。

「まあ、出会ったばかりだし急には決められないよな。やっぱりお互いの事を深く知らねえとさ……」

浩太がどうするべきか悩んでいると三原は何か思いついたようで、強く握った右手で左の掌をわざとらしくポンッと叩いた。

「よし、沢村あの3人とデートに行つて来い」

ちょっと待つてくださいと止めようとしたときには、三原はもう部屋中に聞こえる声で叫んでいた。

「おーい、河上！沢村がお前たちと遊園地に行きたいってさー」

「本当か!？」

ケーキに夢中だった神子が浩太を凝視し、動きを止める。

「デートか！？デートだな？私が最高に楽しい遊園地デートにしてやるっ！」

「うはぁー、あたしも行く！面白そうだね！」

「一緒してもよろしいですか？」

苺を突き刺したフォークを持ったまま小桃が手を上げ、いつのまにか傍にいた絹代が浩太を潤んだ瞳で見ている。

「……………『はーれむ』とは遊園地に行くことですか」

いや、違いますと彩の言葉を心の中で否定して、歓迎会でもこんなに疲れたのに一緒に出かければもっと疲れることになるのだからな、と浩太は少し先の未来を想像して溜め息を吐いた。

10話「何だっぺしてすよ」(後書き)

登場人物 4

東郷 小桃

(とつごう こもも)

遊戯部 副部長

3年生

ロリ。楽しいこと大好き
好きなゲームは テレビゲーム
特に格闘アクション

11話「行くぞ！」

その日浩太は、学校が休みなので家でごろごろ過ごす予定だった。

朝の光を感じながらも起き上がる気になれず、ごろんと寝返りを打つ。小鳥のさえずりが窓ガラスの外から響き、特に理由も考えないで「良い朝だ」と浩太は思った。

暖かなベッド、程よい眠気。もう一度夢の世界へ旅立とうと瞼を閉じる。

しかし、突然鳴り始めた携帯電話の着信音によって、意識は現実に戻された。

「……………もしもし？」

画面も見ないまま耳に携帯を押しつける。誰だ…休日の朝早くから何の用だ。

「おはよう浩太、遊園地に行くぞ！」

「は？」

この声は聞いたことがある。美人で、強引で、浩太のことが好きらしい遊戯部部長の声。

「遊園地……………ですか」

「ああ、学校近くの遊園地、知ってるだろ？そこに30分後に集合だ」

そこまで聞いて、「あの3人とデートに行つて来い」という三原の言葉を思い出す。神子は楽しそうに遊園地デートについて計画を練っていたが、とうとう現実になるのか。

「えーと、どうしても行かないとだめですか？」

「もちろんだ。…浩太、自分の弱みが書かれているファイルを屋上からばらまかれたくはないだろう?」

「……わかりました、すぐ行きます」

「ああ、待ってる」

ベッドから立ち上がり身支度をすますと、携帯電話と財布を引っ掴んで家を出た。浩太の家は学園から近い場所にある。そして神子の言っていた『遊園地』は歩けば5分で着く場所にあった。

「あ、浩太くんだー!」

『ラッキーパーク』というダサイ名の赤と黄色で書かれた看板が見えた時、幼い声が自分を呼んだ。きよろきよろと周囲を見回すと、入口付近で制服姿の5人を発見する。

「よし、今から出席をとるぞ!」

そう言っつて神子は浩太の手を取り、絹代と三原の間に押し込んだ。一列に並んだ遊戯部のメンバー。遊園地に来ていた親子やカップルは不思議そうな顔でこちらを見ている。恥ずかしい。その視線から逃れるように浩太は下を向いた。

「小桃先輩」

「はい、いまーす!」

小柄な少女がピョンピョンと飛び跳ねる。

「彩」

「はい」

落ち着いた少女が短く答える。

「絹代」

「はい、神子さん」

美しい少女が微笑んで返事をする。

「浩太！」

「……はい」

「犬！」

「犬じゃねえよ！」

三原の言葉は無視して、「うん、これで全員だな」と満足そうに神子は笑った。そして彼女は鞆から緑色の紙を何枚か取り出し部員たち配つていく。渡された紙にはでかかどとゴシック体で『遊園地デートのしおり』と書かれていた。

「…遠足のノリかよ…」

浩太の隣で三原が呆れたように呟く。

(てか、6人でデートっておかしいよな)

そのことについて聞くべきかどうか浩太が迷っていると、本日の予定について神子の説明が始まっていた。

「まず、絹代と浩太のデートで1時間。それから小桃先輩と浩太のデートで1時間。昼食休憩1時間を挟んで、私と浩太のデートで1時間だ」

「え、全員で遊ぶんじゃないんですか？」

「デートだぞ？二人つきりするものだろう！」

デートって1時間ごとに女の子を変えてするものではないと思う。しかもそれに少女たちが納得しているのは何故だろうか。

「3人とのデートが終わったら、ラストデートだ。浩太と一緒に過ごしたい部員を選んで観覧車に乗る。いいか、ラストデートの相手が観覧車に乗れるんだからな！お試しデートの間は観覧車に行くなよ！」

きつめの口調で念を押し、神子はこちらに顔を向けた。

「以上だ。浩太、何か質問はあるか？」

「はいっ！」

元氣よく手を上げたのは、左手に緑のしおりを握りしめた三原だった。

「デート中、オレはどうすればいいんですか！？残りのメンバーとデートしていいんですか！？」

「いいわけあるかっ！黙れ犬！」

がつんつと鈍い音。神子に殴られた箇所を押さえながら三原は顔をしかめた。

「痛いです、部長」

「当然だ、痛くしたからな。…まったくお前はバカか。朝、学校に集まっていた打ち合わせで、残りのメンバーは別行動だと言っただろう。覚えてないのか？」

（あだから全員制服なのか）

学園内へ私服で登校することは許されない。もちろん部活などで休日に学園に行ったとしてもだ。浩太は2人のやり取りを眺めながら、1人だけTシャツとジーパンは浮くよなあと考えていた。

「ワンちゃん、そんなにデートの相手がほしいのー？」

三原の腕をぽんぽん、と軽く叩いて質問したのは小桃だった。「ワンちゃんはやめてください」と言いながらも彼の目は『デートの相手』と聞いた瞬間にきらつと光る。

「はい、どーぞ」

小桃が三原に手渡したのは河童のぬいぐるみだった。プラスチック製の皿は光沢があり、周りにギザギザに切られたフェルトが縫い付けてある。その下から覗く瞳は真っ黒で、ゴマを二粒並べたような鼻と、アヒルのような口がある顔はなんとも愛嬌があった。

「あたしの友達の、らくしゅみーばーいーちゃんだよ。彼女は照れ屋でーとっても可愛いの！すっかりエスコートしてあげてね！」

「…東郷先輩、どこからつつこめばいいかわからないです」

そう言いながらも、らくしゅみーばーいーちゃんを受け取った三原。

「もう、お前とデートするしかないよなあ」

彼は寂しそうにぬいぐるみの頭を撫でていた。

「浩太さん」

絹代に名を呼ばれ返事をしようとしたとき、手に何か温かいものが触れた。ぎゅっと握ってくるそれは白く細い彼女の手で。

「最初はわたしとのデートです。行きましようか？」

頬をほんのりと赤く染めて、絹代は指を絡める。

遊園地に来ていた客から注目された時とはまた別の恥ずかしさを感じて、浩太は下を向いてしまった。

「…どの女だ？」

様々な色で溢れる遊園地で、黒ずくめの集団が神子たちをじっと見つめていた。

その不審な集まりの中心にいた男が、もう一度声を上げる。

「おい、誰か写真とか持ってねえのか？」

「あ、持つてるっす！」

男の左側から飛び出してきた青年は、携帯電話を開いてボタンを操作した後画面を差し出した。

「これが河上神子っすよ。紅葉学園にいるやつから写真を送ってもらったんですけど、実物の方が美人っすねー」

「ふうん」

画面の中の少女から数人と歩いている神子へ視線を移し、男はニヤリと笑う。

「お前ら、作戦はわかってるな？あの女が一人になった所を狙うぞ」
周りにいた何人も男たちが心得たように頷く。そのとき、傍を通りかかった少年が集団の真ん中にいる男を指差してこう言った。

「おにいちゃん、へんなあたまー」

「こつこらっ！そんなこと言っちゃあいけないっす！」

青年が青ざめて叫び、無言で動かない人物にそっと顔を向ける。青年以外のメンバーも指差された男を窺っていた。

「おい、ガキ」

静かな声が全員の耳に届く。きよとした表情で少年は声の主を見上げていた。

「これのどこが変な頭に見えんだよ？」

一歩、一歩、少年に近づきながら、男の頭上のそれは太陽の光を浴びて輝き、存在を主張している。

「古くから愛され、純真な男たちのハートをがっちり掴んできたそんな髪型。いいか、これはな……」

すっと息を吸い込み、少年の耳元で至高の髪型の名を男は囁く。

「リゼンって言ったよ」

11話「行くぞ!」(後書き)

登場人物5

真島 絹代

(まじま きぬよ)

遊戯部 部員

1年生

男子たちの憧れ 大和撫子

好きなゲームは トランプを使つてのゲーム(ポーカー、ブラックジャックなど)

12話「だめ、ですか？」

学園に入学してから3人の美少女たちに告白されたが、一番驚いたのは真島絹代からの告白だった。

遊戯部に入部する前、クラスメイトと言っても彼女とはほとんど接点がなかった。挨拶や必要最低限の用事だけ。図書室に行くと図書委員である彼女の姿をたまに見かけたが、話をすることもない。

「浩太さん、わたしあそこに行ってみたいです」

その絹代が今、自分の隣を歩いている。しかも恋人のように手をつないで。

「え、あそこ？」

絹代の指差す先には、「きゃーっ!!」とか「いやああー!!」とか恐ろしい悲鳴のする黒塗りの建物があつた。どうみてもあれだ。あれしかない。

「……真島さん、マジで行くんですか？」

「はい。名前は知っていますが、わたし『お化け屋敷』って行ったことがなくて」

彼女はキラキラと瞳を輝かせ、こちらを見上げている。

「だめ、ですか？」

そんな顔でお願いされて断る男はいないだろう。

だが、ラッキーパークでお化け屋敷といえは……

「わかりました。……行きましょうか」

これだけ楽しみにしている彼女をガツカリさせるわけにはいかない。浩太の不安は消えなかったが、絹代の手を引いてお化け屋敷に行くことにした。

「あ、この次がわたしたちですね」
目の前にいたカップルが入口から奥へ進んでいく。そして暗闇に2人の姿が溶け込んだ瞬間、ギギギギと嫌な音をさせながら扉が閉まった。

『ぎゃあぁーっ！っ！』

入って5秒ぐらいの場所で恐怖ポイントがあるらしい。早すぎるだろ。周りの雰囲気や音でじわじわと心に余裕を無くしてから脅かすものではないのか、お化け屋敷って。

「ふふっ楽しそうですね」

青ざめる浩太とは対照的に、絹代は嬉しそうに微笑んでいる。意外なことに彼女は怖くないようだ。

別に、「きゃーこわーい！」と言って頼られたかった訳ではない。

……ないのだが、何だろうかこの複雑な心境は。

『トリプルホラードキバクハウス』と血文字風に書かれた看板が、風によってギシギシと不気味に鳴いている。ギャグみたいな名前のお化け屋敷にビビっていることが酷く情けなかった。というかトリプルってなんだ。

「浩太さん、和・洋・中と恐怖の種類が選べるみたいですけど、どれがいいですか？」

ここは料理屋か！？とツツコミを入れるべきなのだろうが、そんな気力は残っていない。

「真島さんが選んでいいですよ……」

答えてから、いつから彼女に対して敬語になったのだろうと思う。初めの頃、自分はタメ口だったはずだ。（絹代は最初から敬語だったが）

クラスメイトである自分のことを知らないと言われ、それからだった気がする。

「いつか普通に話せるといいな」

「はい？どうかしました？」

「いえ、何でもないです」

不思議そうな絹代に無理矢理作った笑顔を向けて、浩太はつながれた手に少し力を込めた。

「大変長らくお待たせいたしました。お客様、どうぞ中へお入りください！」

遊園地のお姉さんが地獄へ誘う鬼に見える。開いた扉の先からひんやりとした空気が流れてきた。

勇気を出して一歩踏み出そうとした途端、絹代にくいつと引つ張られる。そしてそのまま暗黒の中へと。ギギギギギ……ぱたん。

「恐怖の種類は『和』を選びました。右に進めば……大丈夫ですか？」

心の準備ができないまま入ってしまったお化け屋敷で、浩太は立ち止まってしまふ。

「あ、えーと……すみません。大丈夫です」

楽しみにしている絹代の気持ちを削ぐような真似はするべきではない。浩太は急いで右の通路へ向かった。

ウフフフフ、誰かが笑っている。
うぐううぐ、誰かが苦しんでいる。

誰か

幽霊……違う、お化け屋敷のスタッフだ。

わかってる、わかってるのだが、冷や汗が背中を滑り落ちる。
すっと、白い何かを通り過ぎた。そして宙に浮かぶ光の玉が浩太の
耳元辺りで「呪ってやる」と囁いてから消えた。

「すごいですね、お化け屋敷って」

絹代の声は落ち着いていたが、輝きの増した瞳で虚空を見つめている。
『トリプルホラードキバクハウス』を彼女は楽しんでいるよ
うだ。

「あれは何でしょうか？」

するりと手が離れ、絹代が先に歩いて行ってしまふ。

「ちよつちよつと、真島さん!？」

自分以外の人がいることになんとか平静を装っていた浩太は、慌て
て前にいた彼女の手を掴む。

「……真島さん？」

くうるり

振り向いた人物は綺麗な黒髪をしていた。しかし、べつとりとした
赤黒いもので汚れてしまっている。いつも優しげに微笑む顔からは
生気が失われ、まるで死人のようだ。

「…な、あ、に…?」

言葉を発した口からは、ぼたぼたと黒いものが落ちた……

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！！！」

「お化け屋敷か、デートイベントではよくある場所だな」

神子は真つ黒な建物が見える位置でベンチに腰掛け、アイスティーをすすっていた。

その隣では小桃が自分の顔よりも大きいハンバーガーにかぶり付いている。

「なあ、河上」

神子が視線を声の方へやると、立ったままの三原がチョコアイスを食べしていた。

「どうしたんだ、犬？」

「犬じゃねえよ！……あのさ、これ別行動って言うより尾行だよな？」

「違う、絹代と浩太を追っているだけだ」

「尾行じゃねえか！」

それに答えることはなく、神子はまたストローをくわえた。透明の筒を茶色い液体が移動する。再び口の中に安っぽい紅茶の匂いが広がった。

「不味いな」

だが、嫌いなわけではない。氷が溶けて水っぽくなったアイスティーも嫌いではない。

「神子様、沢村と真島が出てきたようです」

「そうか、ありがとう」

座っている神子には無理だが、背後に控える彩には2人の姿が見えたようだ。

「さあ、行くか。もう少しで小桃先輩と絹代が交代の時間だ」

「ほうふあね、ふあんふあるふお！」

小桃が何か言いながら立ち上がるが、口に含んだハンバーガーのせいでさっぱり内容が理解できない。

「…小桃先輩が食べ終わってから行くか」

空は青く澄んでいて、絶好のデート日和だ。

不安なことなんて一つもない。なのに、どうしてだろうか。何かが起こりそうな予感がする。

「……不味いな」

神子の呟きは隣の小桃にも聞こえなかった。

12話「だめ、ですか？」（後書き）

登場人物 6

三原 祐平

（みはら ゆうへい）

遊戯部 部員

2年生

不幸属性 浩太がいなかったら主人公っぽい
好きなゲームは 人生ゲーム

13話「マジッすか!？」

沢村浩太は、ホラーが好きか嫌いかについて考えたことがない。友人に誘われれば一緒にお化け屋敷に入る。ホラー映画を見れば恐怖シーンにびくりと反応する。要するに、その程度だ。

絹代からお化け屋敷に行きたいと言われた時も、普通の遊園地ならば何も考えず頷いただろう。

しかし、誘われたのは『ラッキーパーク』のお化け屋敷だった。

『ラッキーパーク』でお化け屋敷と言えば、県内一恐ろしい場所として有名である。多くの心霊スポットを巡ったオーナーがデザインした建物。廃墟となった病院や学校から持ってきたガラクタたち。

そんな特別な空間でお化け役となって働くには、3年間の研修が必ず要らしい。

『本当にホラーが大好きで、ホラーのためなら死んでもいい!くらいの人じゃないと、後悔することになる』と、何かの雑誌に書いてあった。

だから一瞬迷ってしまったのだ。

可愛い絹代の頼みでも、中に入って自分は後悔しないだろうか、と。

「楽しかったですね。浩太さん」

満面の笑みで、絹代が隣を歩いている。

室内で一度離された手は再びつながら、傍から見れば恋人のようだ。

まあ、そんな甘い関係ではないのだが。

「……真島さんが楽しかったのなら良かったです」

明るい屋外に出ても浩太の気は晴れなかった。

何度も何度も何度も何度も、血みどろの女が振り向く映像を脳が勝手に再生するのだ。

「もしかして、体調がすぐれないのですか？」

浩太が暗い顔をして俯いていると、絹代が心配そうにこちらを窺っていた。先程まで嬉しそうに笑っていた絹代に悲しい表情をさせたくないと、浩太はぐつと顔を上げる。

「いえ、何でもありません。元気ですよ？」

「そうですか。あまり無理しないでくださいね？」

「はい……で、次どこ行きましょうか？」

「うーんそうだなー、やっぱり絶叫系かなあー」

隣にいる絹代にした質問の答えは、何故か後ろから返ってきた。間延びした幼い少女の声には聞き覚えがある。

驚いて振り向いた先には、見慣れたメンバーがずらりと並んでいた。

「はぁーい、絹代ちゃん。交代の時間だよー」

右手にソフトクリーム、左手にクレープを持った小桃が、ぱたぱたとこちらに駆けてくる。

その様子は好きなものを買ってもらってはしゃぐ子どものように微笑ましかった。

それにしても時間が経つのは早い。

絹代とデートを始めたのは少し前だと思っていたのに、もう別れなければならぬのか。

「ほら浩太、行って来い。時間は待ってくれないぞー」

神子はひらひらと手を振って浩太を送り出す。その隣で三原も手を振っていた。

「沢村、東郷先輩が面白い場所に連れてってくれるってさ」

「はぁ、絶叫系ってジェットコースターとかですか」

「…普通はそう思うよな」

三原はそこでニヤツと笑う。よく分からないが、ジェットコースター

「ではないらしい。」

「東郷先輩。沢村に教えてやって下さいよ、どこへ行くか」

「うあ？」

口の中へクレープを運んでいた小桃が、三原の方へ顔を向け変な声で答えた。もう片方の手に持つソフトクリームは二分の一以上が無くなっていく。

「ふ、んーとね、あそこ。あそこに行くよー」

「あそこってどこですか？」

うふつと笑う小桃の瞳は、お化け屋敷に入りたいと言った絹代よりも輝いていた。

とても嫌な予感がするのだが、先程よりも怖い思いをする場所なんてあったらどうか。

「あのね、バンジージャンプしに行こうかなーって」

「浩太くん、大丈夫ー？震えてるよ、手」

「は、はい。だ、大丈夫です」

「心配しなくても、一回落ちちゃえば何も怖くないからね」

「は、はい。怖くないです」

命綱だつてあるのだからそう簡単に死んだりしないだろう、と分かっているのだが小桃のように楽しめそうにはない。まだ来るな、早く終われと逆のことを心の中で唱えながら、順番を待つ。

「いやあードキドキするねー。緊張してきた」

どう見てもリラックスしている小桃は、浩太の手を握って足元の景色を眺めている。

「人が小さいねー。あ、あれって神子ちゃんかなー？」

そう言われても、その視線の先を見る勇氣はなかった。

きっと地上は遠いのだろう。見てしまえば逃げたくなるに決まっている。

「浩太くん。あたしたちの番だつてー」

きた。

とつとつ飛び降りる時がきてしまった。

「あたしが先に行くねー」

係の人にガチャガチャとベルトや紐を取り付けられる小桃を見守る。この次は自分だ、と思うと恐怖が増した。

「いーち、にー、さーん、バンジーー!!」

謎の掛け声で落ちて行った小桃は、すぐに階段を駆け上がって浩太のもとまで戻ってきた。

気がつけば手を引っ張られ、気がつけば準備が終わり、気がつけば小桃に背中を押されていた。

「いつてらっしやーいー!!」

「お客さまああ！急な飛び降り危険ですうう!!!」

「ぎゃああああああ!!!」

「河上神子も美人つすけど、周りの女の子も全員可愛いつすねえ」
背が高く痩せた青年が、遊園地の案内板の陰から神子たちを見つめていた。

「まだあの女は1人にならねえのか？」

青年に見張りを頼んでいたリーゼントの男が、近くの青い屋根の店から出てくる。

その男の口元は何故か茶色く、甘い香りがした。

「…悪井先輩、なんか食べました？」

「ああ、チョコレートパフェを食った」

悪井と呼ばれた男は服の袖で口周りを拭い、きよるきよると園内を見回す。お昼時でもアトラクションから客が減ることはなく、カッブルや親子たちが目の前を歩き交っていた。

「他の奴らはどうした？何でいねえんだ？」

「昼飯食いに行くからお前一人で見張ってる、って皆どこかに行っちゃったつす」

しょんぼりした青年は、チョコレートが付着した悪井の袖口を羨ましそうに見ている。これだけお腹がすいていれば服だって食べられるかもしれない。そんな気がしてきた。

「お前も何か食うか？奢ってやるよ」

「マジツすか!？」

青年は店へ駆け込むと、目立つピンク色の商品名を指差す。

「ウルトラデラックススペシャルジャンボハンバーグください!!」

「一番高い商品を注文するな!!」
悪井は少し丸めた遊園地のパンフレットで、青年の頭を思いっきりぶっ叩いた。

14話「どうかしましたか？」（前書き）

食事中の方は、読まないほうがいいと思います。

14話「どうかしましたか？」

「それじゃあ、いただきます！」

「いただきます！」

昼時である。

恐怖のバンジージャンプを終えた浩太は、小桃に連れられるまま、園内にあるレストランへ向かった。そこで神子たちと再会し、昼食となったわけだが。

「いやあ、おいしーねえ！ほら、浩太くんも、エビフライ食べる？」

ニコニコ顔で小桃がフォークに突き刺さったエビフライを差し出した。カラッと揚がったそれはとても美味しそうなのが、今の浩太に食欲は全くない。

「い、いらないます！」

食欲どころか、エビフライから漂う油の匂いで吐きそうだ。食事中なのでそのことを口にはしない。

やはり、先程のバンジージャンプのせいだろう。

お化け屋敷もそうとうキツかったが、バンジーはそれ以上だった。

「どうした浩太、食べないのか？」

カレーライスのスプーンで口に運びながら、正面に座る神子が話しかけてきた。

「あ、すみません。食欲なくて」

「別に謝らなくてもいい。まあ、無理はするな。午後からは私とのデートだからな」

神子はそう言って残りのカレーライスを平らげ、すっと立ち上がった。

「トイレに、行ってくる！」

そんな偉そうに言うことでもないと思う。というか本人は偉そうに言ったつもりはないのかもしれない。

続いて彩が、音もなく立ち上がる。もしかして、神子に付いて行くのだろうか。

「……彩、トイレぐらい一人で行ける」

「しかし、神子様」

「い、い、か、ら、お前は座ってる」

肩を押して彩を無理矢理イスに戻し、神子は去って行った。

以前、神子の護衛をしていると聞いたことがあるが、トイレまで一緒に行かなければならないのか。

「彩さんは、神子さんのことを本当に大切になさっていますよね」

絹代の言葉と同じものを、浩太も前々から感じていた。常に後ろに控え、何をするにも神子が一番。柚木彩の生活は、河上神子を中心にして回っていると言ってもいい。

「私は……護衛ですから」

神子の傍にいない彩は、少し寂しそうにみえた。表情は変わらないので、何となくそう思ったただけだが。

「あれ？そういうえば、ワンちゃんは？」

「え、三原先輩ですか？」

横を見れば、つい先程までカキフライをバクバクと食べていた三原がいない。どこへ行ったのか、その答えは彼の正面に座っていた少女が知っていた。

「三原さんなら、青い顔をして『すまん、オっオレはもうだめだ……』と言いながら、あちらに向かわれましたよ」

絹代の指差す先には、青い男子トイレのマーク。他のメンバーはそれで彼の状況を察することができた。

「大丈夫かな…三原先輩」

思わず口からそんな言葉が漏れる。

食べていたのはカキフライ。それが原因ならとんでもないことになるはずだ。店の責任問題にまで発展するかもしれない。

「……まあ、いいか」

しかし、あの三原である。普段の生活を見ていると、遊戯部のメンバー（主に神子）に相当酷い仕打ちを受けている。きっと彼は丈夫だから、生きているんだ。そうに違いない。

他の部員たちもそう思っているのか、すでに興味は別のことに移っていた。

「あ、店員さん！パフェ追加でー！」

小桃はエビフライ定食を完食し、次はデザートのように。彩も絹代も食事を続けている。

（気分も少し落ち着いてきたし、何か注文しようか）

浩太はテーブル上のメニューに手を伸ばした。

うららかな午後だった。

子どものはしゃいだ声や、アトラクションから流れる曲が園内に満ち、みなが思い思いの時間を楽しんでいる。

本当にうららかな午後だったのだ。

その時まで。

突然、彩が立ち上がった。その勢いに、何かと部員たちが注目する。

「私、神子様の様子を見てきます」

一言だけ残し、彩はトイレに向かって駆け出した。食事をする場所で走るのは良いことではないが、それを今気にするものはいなかった。

「確かに、遅いよね。ワンちゃんと同じ目的でトイレに行ったんじゃないんだし」

小桃の目の前には、空になったパフェの器が置かれている。つまり、それを食べ終わるまで、時間が経ったということだ。

「わっわたしも、神子さんが心配ですし、行ってきます」

絹代が彩の走って行った先へ向かおうとした時だった。こちらへ戻ってくる彩が見えた。しかも走っている。

浩太たちのテーブルまでやってきた彩の顔色は悪かった。眉間に皺がよっている。

「彩先輩、あの…神子先輩は？」

自分の声が硬くなるのがわかった。楽しい話ではなさそうだ。

「神子様が…いません。…どこにも」

そして、事件は起こった。

「あのお……すみません」

トイレから出て席に戻ろうとした神子に、後ろから声がかけられた。振り返ると、分厚いレンズの眼鏡とマスクをした年老いた女性が、こちらを見つめている。

「どうかしましたか？」

年上には、敬語。これは基本だ。

自分の奔放な態度を知っている友人たちは、何故か年上に対して敬語で喋る神子を見ると、変な顔をする。

「いやあ、実は孫が、迷子になってしまったようで…見ませんでしたか？黄色い服を着た男の子を？」

「いえ、見ていませんが」

迷子か。この広い園内で、子ども1人を探すのは一苦労だろう。

「もし、よろしければ、探すのをお手伝いしましょうか？」

「本当ですかい？助かりますわあ」

腰の曲がった老婆は、ペコペコと何度も頭を下げた。それにしてもお年寄りというのは小さいイメージがあるが、彼女は身体が大きい。やはり、日本人の体形が昔と変わってきているというのは真実なのか。

「お孫さんが行きそうな場所に、心当たりはありませんか？」

「そうだねえ……そう言えば、巨大迷路に行きたいって、いったねえ」

「……巨大迷路」

巨大迷路は、昼から浩太と共にデートへ行こうと思っている候補の一つだ。

このレストランへ来る途中に見かけて興味を持った。下見を兼ねて行ってみるのもいいかもしれない。

「では、ここで待っていてください。お孫さんを探してきますから」「いやいや、わたしや、まだまだ元気だからね。孫が見つかるまでは、歩けるよ」

お年寄りをあまり歩かせない方が良いと思ったのだが、祖母にとっては孫が一番なのだろう。

「じゃあ、行きましょうか」

神子は、年老いた女性に手を差し出す。

「……ありがとうございます」

お礼を言っ て触れてきた手は、ゴツゴツしていても大きかった。

この時、その手を振り払って逃げてしまえばよかったと、神子は後悔することになる。

15話「見つけた！」

「神子先輩が……いない？」

それは一体、どういうことだろうか。

トイレに行つて、帰つてこない。つまり行方不明。

「……神子様を探してきます」

動けない部員たちの前をすつと通り過ぎ、彩がレストランから出て行く。

唇を噛みしめて、感情を押し殺しても、彼女が何を考えているのか分かった気がした。おそらく、自分を責めているのだ。守るべき少女を見失ってしまった自分を。

ガヤガヤと聞こえる客の声がどこか遠く感じた。彼らの声はただ楽しそうで、浩太たちのことを顧みようとはしない。

「あの、これってそんな深刻な話じゃ……ないですよ？…神子先輩が勝手にどつか行つちゃったってだけですよね？」

嫌な空気を誤魔化そうと、笑いながら尋ねてみたが無駄だった。小桃と絹代の顔は晴れない。それどころか益々場の雰囲気は重くなる。「うーん、そう思いたいんだけどねー」

普段と小桃の喋り方は変わらなかったが、声に張りが無かった。

「前にもね、神子ちゃんがいなくなっちゃうことがあったんだって」「小桃さん、その話は……」

どうやら、部外者にはあまり話したくないものらしい。絹代は止めようとしたが、この場にいる誰よりも小さな少女は、静かな瞳でそれを黙らせた。可愛い外見をしていても、自分よりも年上の人だったと急に思い出す。

「浩太くんも遊戯部の部員だしね。知ってたほうがいいんじゃないかな」

そんなはずはないのに、耳元で誰かが喧騒のポリウムを下げた感覚。

はつきりと、その言葉だけが耳に届く。

「あのね、神子ちゃんは昔、……誘拐されたことがあるの」

「見つけた！」

声を上げると、握っていた神子の手を更に強く握りしめ、年老いた女性は駆け出した。

「はっ！？ちよっ！！」

予想していなかったその動きに抵抗することもできず、身体が引っ張られる。植物でできた壁しか見えない場所で、彼女は本当に探し人を発見できたのだろうか。

少し、状況を整理したい。

神子は、孫と離れ離れになってしまったらしいお婆さんと一緒に、その孫がいるらしい巨大迷路に向かった。受付にいる係員の女性に、子どもが1人でうろついていなかったか聞いてみようとした矢先の

ことだ。

「孫だ！孫だわ！」と唐突にお婆さんが叫び出し、「見つけた！」と巨大迷路の中へ走りだしたのである。

……以上、状況整理終わり。

「あの！？すみません」

年齢を感じさせない風のような速さで、老婆は足を動かす。目的の何かに集中し、神子の声に反応することもない。他にすることもなく、こうなれば共に走るだけだ。

「見つけたあああ！！見つけたあああ！！！！」

「それはよかったですねええええ！！！！！！」

走って、走って、走って。

そのうちに、何故自分が走っているのかわからなくなる。

運動不足解消？いや、違う。目の前の年老いた女性に手を引かれて
いるからだ。

手。その女性の手は大きい。どうしてだろう。自分の祖母のことを
思い浮かべる。もっとしわくちやで、小さくて、しっかりと使い込
まれた「手」だった。

しかし、この繋がれた手はどうだろう。

骨ばっっていて、日焼けしたその手は ……

「見つけましたよ、悪井先輩」

突然、疾走していた老婆が立ち止まる。勢いそのまま、神子は彼女
にぶつかってしまった。その衝撃で2人とも地面に倒れてしまうか
と思ったが、がっしりと神子は老婆に受け止められていた。

「なっ!？」

抱き締められるような体勢になって気がつく。いや、気がつくのが遅かったぐらいだ。

この人は、男だ。

もう正体を隠そうとは思わならしい。折り曲げていた腰を伸ばし、分厚いレンズの眼鏡とマスクを取り払う。現れたのはひよろりと背の高い青年だった。

慌てて青年を突き飛ばし、距離をとる。騒ぐ心音を落ち着かせようと、神子はゆっくり息を吸い込んだ。

彼女は彼女ではなく男だった。つまり、孫を探していたというのは嘘ということになる。では、目的は何か。そんなもの、自分の立場を考えればすぐに答えは出る。これまでだって経験したことがあるではないか。

「よくやった。山田」

背後からの声に、びくりと神子の身体が動いた。

そうだ、年老いた女性に化けていたこの男は「見つけましたよ、悪井先輩」と言っただけで立ち止まったのだ。悪井先輩、と呼ばけられたもう一人がこの場にいるのは当然だろう。

思い切って振り向くと、布を纏った女性が天を指差す石像を背景に、悠然たる態度で微笑む男がいた。

「お前が、河上神子か」

それには答えず、神子は睨みを返す。

名前まで知られているのだ。わざわざ返事をする必要はあるまい。

そう思つて視線を逸らそうとするが、ふと、男に違和感を覚える。

「……お前、髪型変じやないか？」
「!？」

何だか異様にテカっている。そして前に突き出すように長い。どこかで見たような、見たことがないような、不思議な髪型だ。

自分の一言で、男は固まつたまま動かない。よく分からないがこれは逃亡のチャンスだ。すかさず辺りに目をやると、今まで走つてきた通路と違い、ぼつかりと何も無い空間が広がっている。いや、何もないということはないか。真ん中には、ほぼ裸とも言える女性が天を指差す石像が鎮座している。その前で変な髪型の男がぶつぶつと呪文のようなものを唱えているがそれは無視した。それよりも大事なのは、その石像の隣に「ゴールまであと少し！」と書かれた看板があることだ。

そしてこの空間からは、右に左にいくつもの道が続いている。どこか適当な通路に飛び込み、出口まで行けば逃げ切れるかもしれない。

「よし!」

迷っている暇はない。神子の足は、一番近い右側の道に向かつて走り出そうとする。

「逃げる」そのことしか神子の頭にはなかった。そしてそれが、大きな間違いだった。

「ちよっ!ちよっ!と待つつす!」

後ろから急に伸びてきた手によって、神子の逃亡は失敗した。ぐいっと力任せに引つ張られ、倒れそうになるのを必死に堪える。もう、この男に受け止められるのは嫌だった。

「待つわけないだろ！離せ！！」

「それは無理っすよ！！」

女の力で敵うわけがないと知りつつも、神子は抵抗を続けた。どうにかしなければならぬ。自分1人の力で。そうしなければ、また彩に心配をかけてしまう。

「困るんっすよ！大人しく人質になってくれないと！！」

その言葉に、神子の中の何かが、ぷつんと切れる音がした。

「ふざけるなっ！！」

16話「残念です」

「……誘拐？」

その単語は、日常生活でまず聞くものではないだろう。しかし、小桃も絹代も黙って頷くだけだった。

「ずっと昔の話らしいんだけどね。神子ちゃんが身代金目的で攫われたことがあったらしくて。といってもあたしは詳しく知らないけど」

「それじゃあ今回もってことですか？」

「その可能性が高いだろうね」

河上神子がお嬢様であることは理解していた。理解はしていたのだが、今日の遊園地デートとやらがそんな物騒なものに繋がると予想できるはずがない。

強引なお嬢様の遊びに付き合うだけだと、そう思っていたのに。

「彩さんだけに頼っているわけにはいきません。わたしたちも探しに行かないと」

絹代の声によって、現実を引き戻される。

そうだ。誘拐だのなんだのと、うじうじ考えているだけでは進まない。ここで立ち止まっている時間を神子搜索のために使わなければ。

「じゃあ、行きましょう。神子先輩を探しに」

その場にいる3人の瞳に、迷いはなかった。

自分の愚かさに腹が立つ。彼女の護衛として存在していることを、忘れてはいけなかったのに。

「……神子様」

午後のゆるやかな空気を裂くように、彩は園内を走り抜ける。その速さに驚いたように、何人も親子が振り向くが、気にしてはいられなかった。

「神子様！どこですか、返事をしてください！」

答えは返ってこない。呼び続けることによって不安は増してゆく。自分のしていることに意味はあるのだろうか。失態を誤魔化そうと必死に探しているフリをしているだけではないのか。……違う、違うのだ。そんなことを考えても無駄なのに、黒い何かが彩を飲み込もうとしていた。

このままではいけない。落ち着け、落ち着け、考える。

冷静さを取り戻すため足を止めると、そこはレストランに向かうとき神子が熱心に眺めていた巨大迷路だった。昼食の時間帯のためか客は見当たらない。

ここにいるのではないか、と一瞬考えたが、トイレに行つてそのままふらふらと外に出て行きはしないだろう。

やはり　　誘拐か。

それは真つ先に思い至つたこと。しかし認めたくなかつたことだ。

ゆっくりと、ポケットの中の携帯電話に手を伸ばす。

自分ではどうしても解決できないときの最終手段。本当は使いたくなかったなんて、この非常時に言っではいられない。ゆっくりとボタンを押して、目的の番号を見つける。

自分の責任だ。自分の、責任なのだ ……

「ふざけるなっ!!」

ぴたり、と力を込めようとした手が止まる。

聞こえた、今、確かに聞こえた。神子の声。

「神子様!」

瞬間、彩は駆け出していた。彼女の声が出た方向、すなわち巨大迷路の中へと。

巨大迷路は屋外にあるため光が差し、暗い印象は受けなかった。だからと言って出口が分かりやすいわけではなく、植物と石で造られた壁のせいで思うように進めない。何度も右へ左へを繰り返して、自分が彼女の元へ向かえているのか不安になる。

「どこですか、神子様!」

もう一度声が聞きたい。そのために彩は先の見えない道を進んでいく。しかしその呼び声は、意中の人物には届かなかった。

「神子さま…か。へえ、あなた、あの嬢ちゃんの知り合い？」

右へ曲がるうとしたそのときだ。

行く手から黒い服を着た男が現れ、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

「……神子様を、知っているのですか」

一歩後ろへ下がった彩を、男は下卑た笑いを浮かべながら見つめる。答える気はないらしい。

「神子様は、どこですか」

「さあ、知らねえな。ところであなた綺麗な顔してるなあ。俺と遊ばねえ？」

「……神子様は、どこですか」

このままでは、自分の知りたい情報を聞き出すことはできない。彩はやり方を変えることにした。

黒く鈍く光るソレを、男の首元に突きつける。殺傷能力はない玩具だが、脅しにはなるだろう。

「おいおい、そんなピストル見せられたって怖くねえぜ」

だが、動揺することなく男は平然としている。大抵の人間は驚くはずなのだが。

「それ、オモチャだろ？俺、本物見たことあるからなあ。ごめんよおビビってあげられなくて」

ぎゃははは、と下品な笑い声が響く。拳銃の形をした玩具を掴もうとした手を、彩はすつと避けた。

「そうですね。残念です」

ばれてしまったなら、しかたがない。

もう一つの方法でこの男を喋らせるだけだ。

玩具の引き金を指で引く。これが本物なら銃弾が飛び出すのだろう。

しかしこれは 水鉄砲だ。

「ぎゃああああっ！！！！」

目に液体が降りかかると、男は地面に倒れこみゴロゴロと転がった。彩はその様子を眺めながら、銃口と言ってもいいだろう部分をハンカチで拭う。

きつと痛くて、堪らないのだ。

水鉄砲だからといって、必ず水がはいっているわけではない。そう、このように「石鹼水」が入っていることもあるだろう。

当然、痛いに決まっている。

「さあ、答えてもらいましょう。神子様は、どこですか」
反抗するようなら、再び痛い思いをしてもらうしかない。彩の武器は一つではないのだ。

「ぐっああああっ！」

「ぶはっ！！！」

突然、壁を挟んだ向こう側から、何かがぶつかる大きな音と誰かの叫び声が耳に入ってきた。何故だろうか、空気が重い。動きを止め、気配を探るために意識を集中する。

「やつやめっ!!」

「へぶっ!」

「ぐわああっ!」

聞こえる声で、数人の男性がいることはわかる。そして彼らが……襲われていることも。

ぐちゃりと何かがつぶれる音、悲鳴。混乱した様子の男たちが逃げ惑う足音。

しかし唐突に何の音もしなくなり、静寂が辺りを満たす。彩の緊張が高まった。

「くそっ仲間がいたのか!!」

彩が石鹸水を浴びせた男が、恐怖で顔を引きつらせながら、立ち上がる。

「……どつどけよ!」

そして彩を押しつけ入口の方へ走って行き、男は見えなくなった。だが……

直後、男が向かったはずの方向で「ぎゃああっ!」という叫びが聞こえ、また静かになる。

引きとめるべきだったのか、しかしそれよりも男たちを襲った存在が気にかかる。

先程の男の仲間ではないようだが、神子の失踪事件に関係が無いとは言えない。

……どくん、どくん、と自分の心臓の音がやけにつるさく響く。

「……神子様」

早く彼女を助けなければならぬ。その役目は自分のものだ。

ゆっくりと息を吸い、一歩踏み出せば、すぐに壁の向こう側を確認す

ることができた。

最初に見えたのは、うっすらと舞う土埃。

そして、視線を落とせば　　黒い服を着た男たちが、何人も倒れている。

慌てて近づき確認すると、死んではないことがわかった。気絶しているだけだ。

どうして、こんなことになっているのだろうか。

少しでも意識のあるものに話を聞けないかと、仰向けに倒れている男に目をやる。

「……………」

その男の服が一瞬きらりと輝いた。

いや、服ではない。黒い服に付着した何かが光ったのだ。

正体を確かめるべく、近づき、そっと手で掴みあげる。

「……………髪？」

金色の長い髪の毛が、太陽の光を眩しいほどに反射していた。

17話「誰だ!？」

「ふざけるなっ!！」

叫んだ勢いで、神子は「山田」という名字らしい青年を振り払った。力はそんなに強くないはずだが、至近距離の大声に青年は驚き、腕を離してしまったらしい。

「えええ!？」

驚いている隙に、一番近かった右側の通路に飛び込む。

助けを求めることができる客がないというのは残念だが、人のいないお陰で今の神子を邪魔するものはなかった。

(とにかく走って、外にしよう)

できるだけ速く、足を動かす。

体育の成績は良い方だ。後はあの男たちの足が遅いことを願うしかない。

右に左にと曲がりながら必死で出口を探し、時々背後を確認する。自分の足音や、ガサガサと草木を服が掠る音で分かりにくいけど、追ってくる様子はないようだ。

「はあ、はあ、……はあ」

息が苦しい。

誰か、誰かが助けにきてくれればいいのに……

普段とは違う弱気な自分に、呆れてしまう。

困ったら誰かが助けしてくれるなんて考えは持つべきではない。

「いつまでも、……はあ、……頼るわけには……」

1人の少女の顔が浮かんだ。

きつと物凄く心配しているだろう。今頃皆で自分のことを探しまわっているかもしれない。

早く戻らなければ、という思いが強まる。だって今日は、楽しいデートのはずだったのだから。

「……………ん？」

少し先の曲がり角に、青いひらひらした何かが落ちている。

青いひらひらした何かは、神子が走って近寄ると急にもぞもぞと動き出し、ひゅんと、角の先に消えた。

「なっ!？」

神子も慌ててその角を曲がると、また少し先の丁字路の真ん中でそれは落ちていた。

何だろうと確認する前に青い物は左の道へ移動したので、神子も左の道へ飛び込む。

「あれは……………」

近くで見えていないのでハッキリとは分からないが、ハンカチではないだろうか。

いや、ハンカチだとしても勝手に動くのはおかしい。動かしている誰かがいると考えるべきだ。しかし、その時の神子に冷静な判断はできなかった。

「はあ、……………はあ、はあ……………」

もう、限界だ。

出口を教えてくれるならどんなことだってする。そんな気持ちがあ

の青い物を追いかけさせたのかもしれない。
ばさっばさっ、青い物が跳ねている。
『こっちへおいで』と誘っているようだ。

「ああ、出口ならどこまでだつて行ってやるよ」

停止しそつになつて足に力を込め、神子は駆けだす。
細い糸が結ばれていた青いハンカチは、それに満足したように少し揺れた。

「何をやっているんだ山田!!」
「すっすみませんっす!!!!!!」

女性の形をした像のそばで、背の高い青年「山田」はリーゼントの男に怒られていた。

河上神子を逃がしてしまい追いかけたが、彼女の足が速かったせいで捕まえることができなかったのだ。

河上神子を逃がしてしまったことは自分のせいだ。しかし山田にも言いたいことがあった。

「で、でも…悪井先輩も、ぼーっとしてたじゃないっすか!!」

「黙れ!!」

「ヒイツ!ごめんなさい、ごめんなさい!!」

山田は急いで頭を下げた。やはりこの先輩に逆らうのは無理なのか。自分の目に涙がじわっと広がるのを感じて、それを手で拭う。怒られて泣くなんて子どものようなと思うが、出るもんは仕方がない。文句を言うのは止めて、悪井に怒りを静めてもらうことにした。

「で、でも大丈夫ですよ。他のやつらも巨大迷路の中でウロウロしてるんつすから。絶対に河上神子は捕まりますって!」

「む、そういえばそうか」

黒い服を着た仲間たちが、監視のために動いているのだ。巨大迷路は見通しが悪くとても広かったが、そこは人数でどうにかするしかない。河上神子や悪井の居る場所に、客が近づきそうになったら阻止する。そういう手筈になっていた。

計画通りにはならなかったが、人質にするはずの少女を見つければ、捕まえるぐらいはするだろう。

悪井は腕を組んで空を見上げている。

リーゼントは今日も立派に存在していて、周りの者を威圧しているようだ。

最初の頃、この髪型に憧れてチームの中にマネをする者もいたが、それに気がついた悪井はマネをしたものを片っ端から殴っていた。彼曰く「俺以外の野郎がこの髪型をすることは許さねえ。目立たねえだろうが!!」だそうだ。

「あの女を捕まえて、身代金をたっぷりもらったらお前はどつ使うんだ?」

「んーそうっすねえ……」

悪井の質問に、山田は自分の欲しい物を次々と思い浮かべていく。買いたい物をするのもいいが、好きなものをあれこれと考えるのも楽しかった。現実には無理なものでも、手に入った気分になるからだろうか。

「色々欲しい物はあるっす。でも一番欲しいのは……」

途中で言葉が途切れた。

目を見開いて、口をぱくぱくと動かす山田を、悪井は怪訝そうな顔で見つめている。

「どうしたんだ？おい、山田？」

その声に答える余裕は、今の山田には無かった。

全身をぶるぶる震わせ、それでも必死にあることを伝えようと、山田は悪井の背後を指差す。

「……何だよ？後ろか？」

伝えるべきか、否か。

この場にいるもう一人の人物とばかり目が合ってしまった悪井を見て、山田は伝えたことを少しだけ後悔した。

伝えなかったとしても、結果が変わることはないだろうが。

「誰だ！？」

引きつった表情で叫んだ瞬間、悪井は地面に転がっていた。瞬間移動ではない。

謎の人物の足払いによって、悪井は倒れたのだ。あまりにも速すぎて止める暇もなかった。

「は、はははは……」

おかしくもないのに、口からは笑い声に似た何かが漏れた。恐怖。

目の前の人物は武器も持っていないし、はっきり言ってしまうと悪井に足払いを食らわせたただけだ。それなのに、今まで感じたことのない恐怖を山田は自覚していた。

次は、自分だ。

長い金髪と、冷めた瞳の持ち主がゆっくりとこちらに向かって来て、

山田は意識を手放した。

18話「それでいいだろ？」

小桃、絹代、浩太は効率を優先し、別れて神子を探すことになった。パンフレットに描かれた園内の地図を3つに区切り、それぞれ走り出す。見つからないかもしれないという不安はある。それでも、自分たちにはそれぐらいしかできないのだ。

「……神子先輩！ どこですか神子先輩！」

浩太は必死に叫びながら、気が強くてどこか憎めない年上の少女の姿を探す。振り返るのは遊園地に来ている客や従業員。そこに求める顔は無い。小さな地図で自身の居場所を確認しながら、とにかく浩太は走る。『誘拐』という不穏な言葉を頭から追いつと、必死だった。

ふと、立ち止まって見上げたのは緑の壁。

なんだこれは、と辺りを見渡して『巨大迷路』と赤と黄色で書かれた派手な看板を発見する。どうやらアトラクションのうちのひとつのような。パンフレットで位置を確かめると、ちょうど巨大迷路の出口付近らしい。こんなところにはいないだろうと方向を変え、歩き出そうとした浩太は、突然背中にどんっという衝撃を感じた。

「……浩太っ！！」

なにかやわらかいものが、浩太の全身をぎゅっぎゅっとう締め付ける。ウエストに回された細くて白い腕や、例えようのない甘い匂いが、考える力を奪っていく。二つの膨らみが背中に押し当てられ、その名称を導き出す前にもっと肝心なことがあると気がついた。今、ど

ういう状況なのか、理解しなければならない。

そっと振り返ると、赤茶色の頭髪が目に入った。

急に抱きついてきた少女は浩太の背中に顔を埋め、その表情を窺うことはできない。だが、彼女が何者なのか、すぐにわかった。

「……………神子、せん、ばい？」

呼びかければ声に答えるように、ぎゅっと抱きしめる力が強くなる。

「無事、だったんですね……………どこに行ってたんですか？」

「浩太、……………浩太」

「はい、何ですか？」

「しばらくこのままでいさせてくれ」

それはこの抱きつかれたままの体勢で、周囲の視線も物ともせず立っている、ということだろうか。恥ずかしさから、それは困ると断ろうとして、浩太は神子の身体がわずかに震えていることに気がついた。

「……………わかりました」

何があったのかは、後で聞けばいい。

彼女は戻ってきたのだ。今はその事実満足することにして、羞恥心をごまかすように浩太は目をつぶった。

「あー！！ 神子ちゃんだ！！」

覚えのある声に顔を上げると、小柄で愛らしい少女がこちらに向かつて駆けてくるところだった。その後ろには、絹代の姿も見える。

「よかったー！ 見つかったんだね！」

近づいてきた小桃に頷こうとして、自分の格好を思い出す。そういえば、神子に抱きつかれたままだったのだ。言い訳をしようと口を開こうとしたとき、神子がすつと浩太から身体を離れた。

「もう、せつかくいい雰囲気だったのに邪魔しないでくださいよ、先輩」

少し怒ったような表情で腕を組んだ彼女は、すっかりいつもの遊戯部部长に戻っていた。触れれば壊れてしまいそうな先程の雰囲気は微塵も感じられない。

「心配したのにーそれはないよ、神子ちゃん！」

「とにかく、ご無事でよかったです。神子さん」

目元の赤い絹代を、神子はそつと撫でた。真剣に心配してくれている彼女に対して、冗談でごまかすのはいけないと思ったのだろう。

「悪かったな、心配掛けて。私は大丈夫だから」

平気だと言うように神子はにっと笑うと、スカートのポケットから携帯電話を取り出した。

「彩にも元気だって伝えないとな。……それにしても、どうしてみんな電話しなかったんだ？探してくれてたなら、私の携帯に電話すれば……」

浩太が真実を伝える前に、神子は自力で気がついたらしい。携帯電話の画面をじつと見つめ、申し訳なさそうに謝った。

「そうか……電源が切れてたのか。……すまん」

「神子さん、もしよろしければどうぞ」
おずおずと絹代が差し出したのは、白く薄っぺらい携帯電話だった。文明の利器を手にする絹代にどこか違和感を覚える。なんとなくか似合っていないのだ。

ありがとう、と受け取った神子はさっそく電話をかけ、数分後に何故か巨大迷路の出口に彩は現れた。相変わらずの無表情だが、神子の前まで歩いて来ると、すっと彩は頭を下げた。

「お護りすることができず、本当に申し訳ありません」

「……」

無言のまま、神子は謝る彼女の肩をつかみ、顔を上げさせる。

「今回も完全に私のミスだ。お前が負い目を感じる必要はない」

「……ですが」

「私は無事だったんだ。それでいいだろ？」

だから何も気にするな、と、神子は声のトーンを上げた。

自分がいなくなったことで生じた暗い空気を霧散させるように、笑顔を浮かべる。本当にもう心配しなくてもいいようだ。

「巨大迷路から出てきたってことは、状況は把握しているな？動けなくしたか？」

「はい、すでに終わらせてあります」

浩太には何のことだかさっぱりだが、神子にはそれで十分だったらしい。満足そうに頷いている。

「警察には連絡しなくていい……少し聞きたいことがあるからな」

「かしこまりました」

「さて、遊ぶか」

『警察』というあまり遊園地とはそぐわない単語が聞こえた気がし

た。しかし、それよりも神子の「遊ぶ」という発言にぎくりと
しまう。そういえば午後からは彼女とデートする予定だったのだ。
「浩太と私でデートをするつもりだったが、……まあいい、みんな
で回るか」

予想外の提案に浩太が驚いていると、何故か小桃にがっとな手を掴ま
れた。

「じゃあみんな楽しんでー！　いくぞー！」

元気よく駆け出す小桃に引きずられ、浩太もその後を追う。神子た
ちを振り返り、絹代もそれに続いた。

雲ひとつない午後の空。その下で、浩太は走る。

何故、神子がいなくなっただのか。それについては神子が「大丈夫」
と口にしていたせいで、あまり深く考えなかった。再会したとき悲
痛な声で浩太の名を呼んだことを忘れたわけではない。だが、その
後の元気そうな姿で、問題ないだろうと判断したのだ。

それゆえ、神子の手がまだ微かに震えていることに、浩太は気がつ
かなかつた。

一人、孤独な戦いを終え、トイレの個室から出てきた三原は首を傾げた。

何故かトイレの出入り口で、レストランの店員が仁王立ちしているのだ。

「お客様、お待ちしてりました」

何を待っていたんだろうか、と疑問をぶつける前に、三原のポケットがぶるぶると振動した。

「すみません」と断ってから携帯を開くと、河上神子から一通のメールが届いている。内容はこのようなものだった。

昼食の会計がまだだからよろしく頼む。

あと、お前もういいから帰れ。

じゃあな。

画面を数秒の間見つめ顔を上げると、笑顔の店員と目があった。その視線を少しずらすと、自分たちが座っていたはずのテーブルには誰もおらず、何故か河童のぬいぐるみがぼつんと残されている。

三原はすっと息を吸い込むと、叫んだ。

「なんでだあああああああ！！！！！！！！！！」

19話「おじょうサン」

「今回のことは全て私の責任です。神子様から目を離してしまい、申し訳ありません」

カワカミグループ本社の一室で柚木彩は対面の男に深々と頭を下げた。これぐらいのことで許してもらおうとは思っていないが、とにかく彩自身が謝りたかったのだ。

「彩ちゃん、キミが気にすることじゃない。だから顔を上げてくれ」困ったような声で頼まれ、そっと目線を男に向ける。

革張りのソファに腰掛けるこの人物こそ、カワカミグループトップの河上正也、つまり神子の父親であった。

「キミは神子の友人だろう？ もっと肩の力を抜いて神子の傍にいてやってくれないか？」

彼の言葉に責めるような響きは感じられない。だからこそ彩はまず自分を許せなくなった。

「友人だから、です。私には神子様を守る義務があります」

親同士が親しかったという理由で、幼いころから神子と彩は共にいた。神子がお嬢様で、自分はボディガードで、それは子どもの頃の遊びだった。そこから全ては始まったのだ。

「私は愚かでした。あの日の出来事も忘れ、神子様のお傍を離れたのです。二度とこのようなことが無いようにいたします。本当に申し訳ございませんでした」

「彩ちゃん……」

正也の諦めたような溜め息が聞こえた。

「わかった……これからも神子を頼むよ」

「はい」

その言葉だけで彩には十分だった。まだ、自分は神子の隣に立つ資格があるのだ。どうしようもないこんな自分でも。

「ところで」

少し、正也の雰囲気の変化する。

「神子と最近仲良くしている男はいるかい？」

「……それは」

嘘をついたところで、部下からの報告は届いているだろう。ここは正直に答えるしかない。

「遊戯部には現在男子部員が2名所属しています。ですが彼らは、あくまで部員です。神子様と特別な関係というわけではありません。偽りを述べてはいない。これで正也が納得するとは思えないが、「何も無い」で終わらさなければ2人が危ないと感じた。」

「ほう……最近入部した1年生に、神子が告白したというのは本当か？」
「ばれている。」

校門という目立つ場所で告白などしたのだから、当然といえば当然だ。しかし、このままではあまりに浩太が可哀相だ。

「神子様がおっしゃるには、『ゲーム』だそうですね」

「ゲーム？」

「はい、『恋愛ゲーム』です。ただの遊びであり、実際の恋愛ではありません」

「……そうか」

正也が少し下を向いてしまったせいで、表情はうかがえない。彩の背中を嫌な汗が流れ落ちた。ダメだったのだろうか。

「ゲーム、か。うん、そうだろうね。今日はありがとう彩ちゃん。神子の学校での様子が聞けてよかったよ」
正也は想像していたよりずっと穏やかな笑みを浮かべていた。信じたかどうかはいまいちはつきりしないが、話はここで終わりだろう。忙しいはずなのに、自分のために時間を割いてくれたのだ。彩は感謝の言葉を伝えて一礼すると、部屋を出た。

「……はあ」

鏡の中の自分は疲れ切った顔をしている。それが気に入らずぐっと力を入れると、もう一人の彩は怒ったような表情になった。

カワカミグループの女子トイレで、いったい何をしているんだか。少し馬鹿馬鹿しくなって手洗い場から離れようとした彩は、この場所に自分以外の人間がいることに気がついた。

鏡に映っているのは、短い金髪と青い瞳そして黒いスーツをまとった少女。

「おじょうサン、さうとうお疲れデスネ」

顔はどうみても日本人のだが、彼女は何故か片言の日本語で喋り、この国の人間とは髪や瞳の色が違っていた。女子トイレでは浮きすぎる存在だ。

「ン？ 不思議そつな顔してるネ」

「あの、貴女は……」

「アタシ？ アタシは通りすがりの謎の女デス！」

「はあ」
言っている意味がよく分からないし、これ以上話す必要もないだろう。

その場を立ち去ろうとした彩は、次の彼女の一言でぴたりと立ち止まった。

「……おじょうサン、泣いてたデシヨ」

「は？」

「フフン、何も言わなくても大丈夫！ アタシは全てを知っていマス」

特に泣いていた記憶はないのだが、金髪少女はなぜかそう思ったらしい。

芝居がかった仕草で手を前に突き出し首をブンブンと振りながら一歩一歩彩に近づいてくる。

「大切な女の子を、肝心なトキに護れなかつタ……悔しいデスヨネ」

「……何のことでしょうか」

「オーウ！ 隠さなくてもいいのデース。アタシはおじょうサン側の人間なのですカラ」

彼女は自分のことを知っている。そして、神子のことも。

警戒するべきだろうかと思うものの、彼女は言ったのだ。『おじょうサン側の人間』だと。

「もしかして、ゆ……」

「さア、これで涙を拭いてくだサーイ！」

頬に無理矢理布を押しつけられ、彩は最後まで喋ることができなかつた。

視界にちらりとしてきたのは、青いハンカチ。

いらぬ、と断る前に金髪少女の手は離れてしまふ。彩は慌てて、落ちないようハンカチを押さえた。

「では、また会いましょー！」
くるりと方向を変え、彼女は女子トイレから出ていった。

本当に不思議な少女である。

彩の推測が正しければ自分のよく知っている組織の人間だろうが今はまだ何とも言えない。もやもやとした状況で悩み続けるわけにもいかず、とりあえず外へ向かうことにした。彼女がまだ近くにいるならば、ハンカチも返した方がいいだろう。少し歩かないといけな
いだろうな、と考えた矢先だった。

観葉植物が綺麗に並べられた通路に出ると、探そうとしていた人物はあっさり見つかった。

「じゃあ行きましようか！ カタギリサン！」
嬉しそうに傍らの男に話しかける、金髪の少女。

横顔だけしか見えないが、彼女はおもちゃを買ってもらったばかりの子どものようにはいしゃいでいる。

その隣にいるのは ……

長く艶やかな金色の髪に黒い帽子、サングラスをかけたスーツ姿の男。

彩は一瞬呼吸をするのも忘れて、彼を凝視していた。

この人は、危険だ。

理解するのに時間は必要なかった。絶対に勝てない。敵意を持たれれば、自分など容易に地へ沈められてしまうだろう。

そしてこの感覚には覚えがあった。
遊園地で巨大迷路へ入ったときの重い空気。正体を確認することを恐ろしいと感じてしまった自分。金色の長い髪も一致する。

「……」

金髪の少女へ何も答えないまま、男は歩き出した。

「あウ、待つてくださいヨ！」

男の後を追う姿は、飼い主にまとわりつく子犬のようだ。

声はかけられなかった。

ただ、もうあの男には出会いたくないと思い、彩はぎゅっと青いハンカチを握りしめる。

手の中の布切れは、縮み上がった自分自身のように思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5916n/>

恋愛ゲーム

2011年11月22日02時00分発行